

吉原新話

泉鏡花

青空文庫

表二階の次の六畳、階はしご子段ごだんの上り口、余り高くない天井で、電燈でんきを捻ひねつてフツと消すと……居合あがわす十二三人が、皆影法師。

仲なかの町ちようも水道すいどう尻じりに近い、蔦屋つたやという引手茶屋で。間まも無く大引おびけの鉄棒かなぼうが廻まわろうという時分であつた。

閏うるさうのあつた年で、旧暦の月が後おくれたせいか、陽氣が不順か、梅雨の上りが長引いて、七月の末だというのに、畳も壁もじめじめする。

もつともこの日、雲は拭ぬぐつて、むらむらと切れたが、しかしほ

んとうに霽あがつたのでは無いらしい。どうやら底にまだ雨あまき氣があり
それで、悪く蒸す……生干なまびの足袋に火熨斗ひのしを当てて穿はくようで、
不氣味に暑い中に冷ひやりとする。

氣候はとにかく、八畳の表座敷へ、人数が十人の上であるから、
縁の障子は通し四枚とも宵の内から明放したが、夜桜、仁和加にわかの
時とは違う、分けて近頃のさびれ方。仲の町でもこの大一座は目
に立つ処へ、浅間あさま、端近はしぢか、戸外おもてへ人立ちは、嬉しがらないのを
知つて、家の姉御あねごが氣を着けて、簾すだれという処を、幕にした。

廂ひさしへ張つて、浅葱あさぎに紺のしの熨斗進上、朱鷺色鹿ときいろかの子のふくろ字で、
うめという名が一絞ひとしぼり。紅くれなゐの括くくり紐ひも、襷たすきか何ぞ、間に合わせ
に、ト風入れに掲げたのが、横に流れて、地じが縮緬ちりめんの媚なまめかしく、

おぼろさつ
 臙に颯と紅梅の友染を捌いたような。

この名は数年前、まだ少くつて見番の札を引いたが、家の抱妓
 で人に知られた、梅次というのに、何か催のあつた節、鼻屑の贈
 った後、幕が、染返しの搔巻にもならないで、長持の底に残
 ったのを、間に合わせに用いたのである。

端唄の題に出されたのも、十年近く以前であるから。見たばか
 りで、野路の樹とも垣根の枝とも、誰も気の着いたものはなかつ
 たが、初め座の定まつた処へ、お才という内の姉御が、お茶聞し
 めせ、と持つて出て、梅干も候ぞ。

「いかがですか、甘露梅。」

と、今めかしく註を入れたは、年紀の少い、学生も交つたため

で。

「お珍らしくもありませんが、もう古いんですよ、私のように。」
と笑いながら、

「民さん、」

と、当夜の幹事の附添いで居た、佐川民弥たみやという、ある雑誌の記者を、ちよいと見て、

「あの妓こなんか、手伝ったのがまだそのままなんです。召あがれ。」と済まして言う。

様子を知った二三人が、ふとこれで気が着いた。そして、言合わせたように民弥を見た。

もつとも、そうした年とし紀ではなし、今頃はもう左衛門で、女房

の實の名も忘れてゐるほどであるから、民弥は何の氣も無さそうに、

「いや、御馳走。」

時に敷居の外の、その長六畳ながの、成りたけ暗そうな壁の処へ、
 紅べにいりゆうぜん入友染の薄いお太鼓を押着おツつけて、小さくなつたが、顔あかるの明
 い、眉はつきりの判然した、ふつくり結綿ゆいわたに緋ひの角絞つのしぼりで、柄も中
 形も大きいが、お三輪といつて今年しちが七、年よりはまだ仇気あどけない、
 このお才さいの娘分。吉野町よしのちよう辺おしごとの裁縫おしごとの師匠ししやうへ行くのが、今日は
 特別いづつ、平時と違つて、途中ちゆうちゆうの金貸かねかひの軒のきに居る、馴染なじみ染おうちの鸚鵡おうむの前へ
 も立たず……黙つて奥山の活動写真へも外それなないで、早めに帰つ
 て来て、紫の包も解かずに、……

「道理で雨が霽あがったよ。」

嬉いそいそ々々 客設けの手伝いした、その——

二

お三輪がちようど、そうやって晴がましそうに茶を注いでいた
処。——甘露梅の今のを聞くと、はツとしたらしく、顔を据えた
が、拗すねたという身で土瓶をトン。

「才さあちゃん。」

と背後うしろからお才を呼んで、前垂まえだれの端はきりりとしながら、棲つま
の媚なまめく白い素足で、畳たたみざわ触さわりを、ちと荒く、ふいと座を起たつ

たものである。

待^{あいらい}遇^いに二つ三つ、続けて話掛けていたお才が、唐突^{だしぬけ}に腰を折られて、

「あいよ。」

で、軽く衣紋^{えもん}を圧^{おさ}え、瘦^やせた膝で振り返ると、娘はもう、肩のあたりまで、階子段^{はしごだん}に白地の中形を沈めていた。

「ちよつと、」……と手繰つて言つたと思うと、結綿^{ゆいわた}がもう階^し下^たへ。

「何だい。」とお才は、いけぞんざい。階子段の欄干^{てすり}から俯向^{うつむ}けに覗^{のぞ}いたが、そこから目薬は注^させなそうで、急いで降りた。

「何だねえ。」

「才ちゃんや。」

と段の下の六畳の、長火鉢の前に立つたまま、ぱつちりとした
目許めもとと、可愛らしい口許で、引着けるようにして、

「何だじゃないわ。お気を着けなさいよ。梅次姉ねえさんの事なんか
言つて、兄さんが他ほかの方に極きまりが悪いわ。」

「ううん。」と色気の無い領うなずき方。

「そうだつて。まあ、可いいやね。」

「可よかない事よ……私は困つちまう。」

「何だねえ、高慢な。」

「高慢じゃないわ。そして、先生と云うものよ。」

「誰をさ。」

「皆さんをさ、先生とか、あの、貴方あなたとか、そうじゃなくって。誰方どなたも身分のある方なのよ。」

「そうかねえ。」

「そうかじやありませんよ。才ちゃんてば。……それをさ、民さんだの、お前まはんだのって……私は聞いてはらはらするわ、お気を注つげなさいなね。」

「ああ、そうだね。」

と納得はしたものの、まだ何なんだか、不心服らしい顔かおつき色で、

「だつて可いいやね、皆さんが、お化ばけの御連中なんだから。」

習ならわし慣で調子が高い、ごく内ないの話のつもりが、処々、どころで

ない。半ば以上は二階へ届く。

一同くすくすと笑った。

民弥は苦笑したのである。

その時、梅次の名も聞えたので、いつの間にか、縁の幕の仮名の意味が、誰言うとなおのずく自然と通じて、投遣なげやりな投むすびばな放しなに、中を結んだ、紅べに、浅葱あさぎの細い色さえ、床の間の籠かごに投込んだ、白とこなつい常夏とこなつの花とともに、ものは言わぬが談話はなしの席へ、仄ほのかな倂おもに立かつていた。

が、電燈でんきを消すと、たちまち鼠色の濃い雲が、ぱつと落ちて、ひさし廂から欄干てすりを掛けて、引包ひつつんだようになった。

夜も更けたり、座の趣は変わったのである。

かねて、こうした時の心を得て、壁際に一台、幾年にも、つい

ぞ使つた事はあるまい、艶つやの無い、くすぶつた燭しよくだい台の用意はしてあつたが、わざと消したくらいで、蠟燭ろうそくにも及ぶまい、と形かただけでも持出さず——所帯構わぬのが、衣紋竹えもんだけの替りにして、夏羽織をふわりと掛けておいた人がある——そのままになつてゐる。

灯あかり無しで、どす暗い壁に附着くつついた件の形は、蝦蟆がまの口から吹出す靄もやが、むらむらとそこで蹲踞うずくまつたようで、居合わす人数の姿より、羽織の方が人らしい。そして、……どこを漏れて来る燈ともしびの加減やら、紹ろの縞しまの袂たもとを透といて、螢ひとつみを一ひと包つつみにしたほどの、薄あおら蒼おい、ぶよぶよとした取留とりとめの無い影が透く。

三

大方はそれが、張出し幕の縫目を漏れて茫ぼうと座敷へ映るのであ
 ろう……と思う。欄干らんかん下のしたのひさし廂と擦れ擦れな戸外おもてに、蒼白い瓦がす
 が一基ひとつもと、大門口おおもんぐちから仲の町にずらりと並んだ中の、一番末の
 街燈がある。

時々光を、幅広く迸ほとばしらせて、潤かつと明るくなると、燭しょく台だいに
 引掛ひっかけた羽織の袂が、すつと映る。そのかわり、じつと沈んで暗
 くなると、紺の縦縞きえぎこえが消々になる。

座中は目で探つて、やつと一人の膝、誰かの胸、別のまた頬ほおの
 あたり、片袖かたそでなどが、風で吹溜ふきたまったように、断きれぎれ々に仄ほのかに見

える。間を隔てたほどそれがかえって濃い、つい隣合つたのなどは、真暗まつくらでまるで姿が無い。

ふと鼠色の長い影が、幕を斜はす違つかいに翻ひら々ひらと伝わつたり……
円さ六尺余りの大きな頭が、ぬいと、天井に被かぶさりなどした。

「今、起たちなすつたのは魯智深ろちしんさんだね。」

と主ぬしは分わらず声こゑを懸かける。

「いや、私わしは胡坐あぐら搔かいています、どっしりとな。」

とわざと云う。……描かける花和尚かおしょうさながらの大入道、この人

ばかりは太ッ腹おの、あぶらぼてりで、宵からの大肌脱おおはだぬぎ。絶えず

はたはたと鳴らす団扇うちわづかい、ぐいと、抱かかえて抜ぬかないばかり、

柱はしらに、えいとこさで凭より懸かる、と畳半畳だぶだぶと腰こしの周まわりに隠かく

れる形ぎょうてい体。けれども有名な琴の師匠で、芸は嬉しい。紺地の素袍すおうに、烏帽子えぼしを着けて、十三絃げんに端然ちやんと直ると、松の姿に霞かすみが懸かつて、琴爪ことづめの千鳥ちどりが啼なく。

「天井を御覧なさい、変なものが通ります。」

「厭いやですね。」と優しい声。

当夜、二人ばかり婦人も見えた。

これは、百物語をしたのである。――

会をここで開いたのは、わざと引手茶屋を選んだ次第では無かつた。

「ちつと変つた処で、好事ものずきに過ぎると云う方もございましょう。

何しろ片寄り過ぎますんで。しかし実は席きを極めるのに困りまし

た。

何しろこの百物語……怪談の会に限って、半夜は中途で不可いま
せん。夜が更けるに従って……というのですから、御一味を下さ
る方も、かねて徹夜というお覚悟です。処で、宵から一晩の註文
で、いや、随分方々へ当って見ました。

料理屋じゃ、のつけから対あいて手にならず、待合申すまでも無い、
辞退。席貸をと思いましたが、やっぱり夜よつびて一夜じゃ引退ひきさがるんで
す。第一、人数が二十人近くで、夜明しと来ては、成程、ちよつ
とどこといつて当りが着きません。こりや旅籠屋はたしやだ、と考えまし
た。

これなら大丈夫、と極めた事になると、どういたして、まるで

帳場で寄せつけません、無理もございますまい。旅籠屋は人の寝る処を、起きていて饒舌しゃべろうというんです。傍はたが御迷惑をなさるとこの方を関所破りに扱います、困りました。

寺方はちよつと聞くと可いいようで、億劫おっくうですし、教会へ持込めば叱られます。離れた処で寮なんぞ借りられない事もありませんが——この中にはその時も御一所で、様子を御存じの方もお見えになります、昨年あの盆時分、向島の或別荘あるで、一会催した事があるんです。

飛んだ騒ぎで、その筋に御心配を掛けたんです。多人数一室へ閉籠とじこもつて、徹夜で、密々ひそひそと話をするのが、寂しんとした人ひと通どの無い、樹林きばやしの中じや、その筈はずでしよう。

お引受け申して、こりや思懸けない、と相応に苦勞をしました揚句、まず……昔の懺悔をしますような取詰め方で、ここを頼んだのでございます。

言訳を申すじやありませんが、以前だとて、さして馴染も無い家が、快く承わってくれまして、どうやらお間に合わせます事が出来ました。

ちと唐突だしぬけに変わった誂あつらえだもんですから、話の会だと言いますと、

（はあ、おはなの……）なんてな、此家の姉御あねごが早合点はやがってんで……」
と笑いながら幹事が最初挨拶あいさつした、——それは、神田辺の沢

岡という、雑貨店の好事ものずきな主人であつた。

四

連中には新聞記者も交まじつたり、文学者、美術家、彫刻家、音楽家、——またそうした商あきんど人もあり、久しく美学を研究して、近頃歐洲から帰朝した、子ししやく爵やくが一人。女にょしやう性しやうというのも、世に聞えて、……家のお三輪うちは、婦人何々などの雑誌で、写真も見れば、名も読んで知った方。

で、こんな場所は、何の見物にも、つい足踏あしづみをした事の無いのが多い。が、その人たちも、誰も会場が吉原というのを厭いとわず、中にはかえつて土地に興おもしろみ味みを持って、到着帳に記ついたのもあ

る。

「吉野橋で電車を下りますまでは無事だったんですよ。」

とそれについて婦人の一人、はまやらんこ浜谷蘭子が言出すと、おそろし可恐く気の早いのが居て、

「ええ、何か出ましたかな。」

「まさか、」

と手ハンケチ巾をちよつと口に当てて、まぶた瞼をほんのりと笑顔になつて、

「お化がばけ貴下、あなたわざわざ迎いに出はしませんよ。方角が分りませ

んもの。……交番がござんしたから、——伺いますが、水道尻は

どう参りましたようかつて聞いたんです。おまわり巡查さんが真面目な顔

をして、

（水道はその四角の処にあります。）つて丁寧よつかどに教えられて、困こつたんです。」

「水を飲みたくつて、それで尋ねたんだと思つたんでしようよ。」
とその連つれだったもう一人の、明座種子あかざたねこが意気な姿で、そして膝に手をきちんとして言う。

「私もはじめてです。両側はそれでも画えに描いたようですな。」
と岩木という洋画家が応じた。

「御同然つかくで、私はそれでも、首尾よく間違えずに來たですよ。北ほ廓かくだというから、何でも北へ北へと見当を着けるつもりで、宅たくから磁石を用意に及んだものです。」と云う堀子爵が、ぞんざいな浴衣がけの、ちよつきり結びの兵児帯へこおびに搦からんだ黄金鎖きんぐさりには、

磁石が着いても何にもせぬ。

花和尚がその諸膚脱もろはだぬぎの脇の下を、自分の手で撥くすぐるように、ぐいと緊しめて腹を揺ゆすつた。

「そろそろ怪談になりますわ。」

確か、その時分であつた。壇の上あがりくち口に気勢けはいがすると、潰つぶしの島田が糶せりあが上あがつたように、欄干てすり隠れに、少わかいのが密そつと覗のぞきこ込んで、

「あら、可厭いやだ。」

と一つ婀娜あだな声を、きらりと銀の平打ひらうちに搦なめて投なげ込んだ、と思うが疾はやいが、ばたばたと階下したへ駆下りたが、

「嘘、居やしないわ。」と高い調子。

二言、三言、続いて花やかに笑ったのが聞えた。駒下駄こまげたの音が三つ四つ。

「覚えていらつしやいよ。」

「お喧やかましゆう……」

魯智深は、ずかずかと座たを起つて、のそりと欄干てすりに腹を持たせて、幕を透かして通とおを瞰みおろ下し、

「やあ、鮮麗あざやかなり、おらが姉ねえさん三人ござる。」

「君、君、その異形いぎようなのを空中へ顕あらわすと、可哀相かわいそうに目を廻すよ。」と言いながら、一人が、下からまた差さ覗しのぞいた。

「家の娘うちかね。」

と子爵きが訊く。差向いに居た民弥きが、

「いいえ。」

「何です。」

「やっぱり通り魔の類たぐいでしょうな。」

「しかし、不意だからちよつと驚きましたよ。」とその洋画家が……ちようど俯向うつむいて巻まきた 蓑たばこをつけていた処、不意を食くらつた眼鏡きんぐらが晃きらつく。

当夜の幹事が苦笑いして、

「近所の若い妓こどもです……御存じの立旦たておやま形かたちが一人、今夜来ます筈はずでしたが、急用で伊勢へ参つて欠席しました。階下したで担たいだんでしよう。密そつと覗のぞきに……」

「道理こそ。」

「（あら可厭だ）は酷いな。」

五

「おおおお、三人が手を曳ひツこで歩ある行ゆいて行きます……仲の町も人通りが少いなあ、どうじやろう、景気の悪い。ちらりほらりで軒行燈のきあんどうに影が映る、——海老屋えびやの表は真暗まつくらだ。

ああ、揃そろつて大時計の前へ立佇たちどまつた……いや三階でちよつとお辞儀をするわ。薄暗い処へ朦朧もうろうと胸高な扱帯しごきか何かで、寂さみしそうに露あれたのが、しよんぼりと空から瞰み下おろしているらしい。」
と円い腕を、欄干てすりが挫ひげそうにのツしと支ついて、魯智深の腹が

たぶりと乗出す……

「どこだ、どれ、」

と向返る子爵の頭へ、さそくに、ずずんと身を返したが、その割に気の軽さ。突然見越入道で、蔽われ掛つて、

「ももんがあ！ はッはッはッ。」

「失礼、只今は、」

と、お三輪が湯を注しに来合わせて、特に婦人客の背後へ来て、極の悪そうに手を支いた。

「才ちゃんが、わけが分らなくって不可ません、芸者衆なんか二階へ上げてまして。」

「ことばも極って含羞んだ、紅い手絡のしおらしさ。一人の婦人が

斜めに振向き、手に持ったのをそのままに、撫なで子しこに映さす扇の影。

「いいえ。そして……ちとお遊びなさいませ。」

「はい、あの、後にどうぞ。」

と嬉しそうに莞爾にっこりしながら、

「あの、明る過ぎましたら電燈でんきをお消し下さいましな、燭しよく台だいをそこへ出しておきました。」

と幹事に言う。雑貨店主が、

「難ありがと有う、よくお心の着きます事で。」

「あら、可厭いやだ。」……と蓮葉はすはになる。

「二ツ、」

と一人高らかに呼よわった。……芸者のと、(可厭だ)が二度目、

という意味だけれども、娘には気が着かぬ。

「え？」

民弥が静しずかに振返つて、

「三輪みいちゃんとの年とし紀は二十はかちつて？」

「あら、可厭だ。」

「三つ！」

「じゃ、三十かつてさ。」と雑貨店主が莞爾にっこりする。

「知らないわ。」

「まあまあ、可いいわ、お話しなさい。」と花和尚、この時、のさのさと座に戻る。

「お茶を入れかえて参ります。」

と、もう階子の口。ちよつと留まつて、

「そして才ちゃんに、御馳走をさせましょうね。兄さん、（吃驚したように）……あの、先生。」

「心得たもんですな。」と洋画家が、煙草の濃い烟の中で。

「貴女方の御庇です……敬意を表して、よく小老実に働きますよ。」と民弥が婦人だちを見向いて云う。と二人が一所に、言合させたように美しく莞爾して、

「どういたしまして。」

「いや、事実ですよ……家はこんなでも、裁縫に行く先方に、また、それぞれ朋だちがありましてな、それ引手茶屋の娘でも、大分工合が違つて来ました。どうして滅多に客の世話なぞするのじ

やありませんや。貴女がたの顔まで、ちやんと心得ていて、先刻さつきも手前ちよつと階下したへ立違いますと、あちらが、浜谷さんで、こちらが、明座さんでしょう、なんてそう言います。

廓くるわがはじめてだつてお言いなされたのを聞いたと見えて、御見物なさいませんか、お供をして、そこいら、御案内をしましょう、と手前にそう言っていましたつけ。」と団扇うちわを構えて雑貨店主。

「そう、まあ……見て来ましょうか。」

「ねえ。」と顔を見合わせた。

子爵かぶりが頭を振りながら、

「お止よしなさい、お揃いじや、女郎じよろが口惜くやしがるでしょう、罪だ

。」

六

「なぜですか。」

「新橋、柳橋と見えるでしょう。」

「あら、可厭いやだ。」

「四つ、」

と今度は、魯智深が、透かさず指を立てて、ずいと揚げた。

すべてがこの調子で、間へ二ツ三ツずつ各めいめい自の怪談が挟まる

中へ、木皿に割わり箸ばしをぎつくり揃えて、夜通しのその用意が、こ

うした連中に幕の内でもあるまい、と階下したで気を着けたか茶飯の

結びに、はんぺんと菜のひたし。……ある おおまがき 大 籬 の寮が根岸にある、その畠に造つたのを掘たてだというはしりの新芋。これだけはお才が自慢で、すじ、蒟 こんにやく 蒟 蕪 などと煮込みのおでん どんぶり を丼へ。目立たないように一銚子 ひとちょうし 附いて出ると、見ただけでも一口呑めそう……梅次の幕を正面へ、仲の町が夜の舞台で、楽屋 なかいり の中入 なかいり といった様子で、下戸 げこ までもついで一口飲 や る。

八畳一杯 かッ 赫と陽気で、ちようどその時分に、中びけの鉄棒 かなぼう が、近くから遠くへ、次第 かす に幽 かす かになつて廻つたが、その音の身に染みたは、浦里時代の事であろう。誰の胸へも響かぬ。……もつとも話好きな人ばかりが集つたから、その方へ気が入つて、酔つたものは一人も無い。が、どうして勢 いきおい がこんなであるから、立続け

に死しり靈りょう、怨おん靈りょう、生いき靈りょうまで、まざまざと顛あれても、凄すこい可こ恐わいはまだな事——汐し時おどきに颯さつと支度さつどを引いて、煙たば草こ盆ぼんの卷まきたばこ
 菘すの吸殻きつが一度いちど綺麗きれいに片附かたく時、蚊か遣や香かうもばったり消えて、
 暈うの目も初夜しよ過かぎの陰氣いんきに白く光るのさえ、——寂さしいとも思おもわ
 れぬ。

(あら可厭だ)……のそれでは無い。百万遍ひゃくまんべんの数取かずとりのように、
 一同いっとうぐるりと輪りんになつて、じりじりと膝ひざを寄よせると、千倉せんくらヶ沖のきの
 海坊主うみぼうず、花和尚はなにやうの大きな影かげが幕まくらをはびこるのを張は合あいにしして、が
 んばり入道いりだう、ずばい坊ぼう、鬼火おにび、怪火あやしび、陰火いんびの数々かずかず。月夜げつやの白しろは
 張はり、宙釣ちゆうてうりの丸行燈まるあんどう、九本の蠟燭ろうそく、四ツ目の提灯ちやうちん、蛇へび
 塚づかを走る稲妻いなづま、一軒家いっけんかの棟むねを転まがる人魂ひとだま、狼おの口くちの弓張月ゆみはりつき、古

戦場の火矢の幻。

おんねん 怨念は 大鰻、古鯰、太岩魚、化ける鳥は鷺、山鳥。

声は梟、山伏の吹く貝、礫場の夜半の竹法螺、焼跡の呻唸
声。

蛇ヶ窪の非常汽笛、箒川の悲鳴などは、一座にまさしく聞

いた人があつて、その響も口から伝わる。……按摩の白眼、癩

坊の鼻、婆々の逆眉毛。気味の悪いのは、三本指、一本脚。

かわやのぞ 厠を覗く尼も出れば、藪に蹲む癖の下女も出た。米屋の縄暖

簾を擦れ擦れに消える蒼い女房、矢絣の膝ばかりで搔卷の

上から圧す、顔の见えない番町のお嬢さん。干すと窄まる木場辺

の洩蛇の目、死んだ頭の火事見舞は、ついおもだか屋にあつた事。

品川沖の姪の影、真乳まっちわたしの渡の朧おぼろみ、蓑うなぎかき、鰻まむしぎる、搔すつぽんの蝮まむしぎる、笊まむしぎる。

犬神、蛇を飼う婦おんなきがえる、墓を抱いて寝る娘、鼈の首を集める坊主、
きつねつき 狐憑、猿小僧、骨なし、……猫屋敷。

で、この猫について、座の一人が、かつてその家に飼った三毛で、年久しく十四五年を経た牝めすが、置炬燵おきごたつの上で長々と寝て、密そつと薄目を睜みひらくと、そこにうとうととしていた老人としよりの顔を伺った、と思えば、張裂けるような大欠伸おおあくびを一つして、
 (お、お、しんど)と言つて、のさりと立った。

話した発奮はずみに、あたかもこの八畳と次の長六畳との仕切が柱で、ずツと壁で、壁と壁との間が階子段はしごだんと向むかいあわ合せに櫃子窓れんじまどのように見える、が、直ぐに隣家となりの車屋の屋根へ続いた物干ひとま。一

跨たぎで出られる。……水道尻まで家続きだけれども、裏手、廂ひあ合わいが連つらるばかり、近間ちかまに一ツも明あかりが見えぬ、陽気な座敷に、その窓ばかりが、はじめから妙に陰気で、電燈でんきの光も、いくらかずつそこへ吸取けはいられそうな氣勢けいはいがしていた。

その物干の上と思う処で……

七

「ゴロロロ、」

と濁った、太い、変に地響きのする声でした、——不思議は無い。猫が鳴いた事は、誰の耳にも聞えたが、場合が場合で、一同

が言合わせたごとく、その四角な、大きな、真暗な穴の、遙かな底は、上野天王寺の森の黒雲が灰色の空に浸んで湧上る、窓を見た。

フト寂しい顔をしたのもあるし、苦笑いをしたのもあり、中にはピクリと肩を動かした人もあつた。

「三輪ちゃん、内の猫かい。」

民弥は、その途端に、ひたと身を寄せたお三輪に訊ねた。……

遠慮をしながら、成たけこの男の傍に居て、先刻から人々の談話の、凄く可恐い処というと、密と縋り縋り聞いていたのである。

「いいえ、内の猫は、この間死にました。」

「死んだ？」

「ええ、どこの猫でしょう……近所のは、皆みんなたま（猫の名）のお友達で、私は声を知ってるんですけれど……可いや厭な声ね。きつと野良猫よ。」

それと極きまつては、内ないしよ所の飼猫でも、遊おいらん女の秘蔵でも、遣手やりての懐ふところご児でも、町内の三毛、斑ぶちでも、何のと引手茶屋の娘いきわいの勢。お三輪は気軽に衝つと立って、襟脚えりあしを白々と、結綿ゆいわたの赤い手絡てがらを障子の棧さんへ浮出したように窓を覗のぞいた。

「遁にげてよ。もう居やしませんわ。」

一人の婦人が、はらはらと後毛おくれげのかかった顔で、

「姉ねえさん。」

「はい、」と、呼ばれたのを嬉しそうな返事をする。

「閉めていらつしやいな。」

で、蓮葉はすはにびたり。

後に話合うと、階下したへ用達しになど、座を起たつて通る時、その窓の前へ行くゆと、希代きたいにヒヤリとして風が冷い。処で、何心なく障子をスーツと閉めて行くゆ、……帰りがけに見るとさらりと開あいている。が、誰もそこへ坐るのでは無いから、そのままにして座に戻る。また別人が立つ、やっぱりぞつとするから閉めて行くゆ、帰りがけにはちやんと開けてあつた。それを見た人は色々で、細目の時もあり、七八分目の時もあり、開放しの時もあった、と言いう。

さて、そのときまでは、言つたごとく、陽氣立って、何が出て

も、ものが身に染むとまでには至らなかつたが、物語の猫が物干の声になつてから、各自おのおの言合おのさせたように、膝が固まつた。

時々灰吹の音も、一ツ鉦がねのようにカーンと鳴つて、寂然しんと耳に着く。……

気合あつたが更あらたまると、畳もかつと広くなつて、向合むかいあひ、隣同士、ばらばらと開けて、間あわいが隔あるように思われるので、なおひしひしと額を寄せる。

「消そうか、」

「大人気ないが面白い。」

ここで電燈でんきが消えたのである。——

「案外身に染みて参りました。人数の多過ぎなせいもありましょ

う。わざと灯あかりを消したり、行燈あんどうに変えたりしますと、どうもち

と趣向せんめいて、バツタリ機巧からくりを遣やるようで一向潮が乗りません。

前の向島の大連の時せんで、その経験あらかわがありますから、今夜は一番ひとつ、

明晃あかりこうこう々ととさして、どうせあらかわ顕まれるものなら真昼間まっぴるまおいでなさい、

明白いでい、と皆さんとも申合せていましたつけ。

いや、こうなると、やつぱり暗い方が配合うつつりが可ようございます、

身が入りませぬ、これから。」

と言う、幹事雑貨店主の冴さえた声こゑが、キヤキヤと刻きざみこ込んで、

響こゝろいて聞きえて、声こゑを聞きく内うちだけ、その鼻たかの隆たかい、瘦やせて面おもな長ながな

のが薄あおら蒼あおく、頬ほのげつそりと影かげの黒くろいのが、ぶよぶよとした出で

処どこの定じやうかならぬ、他愛あかりの無ない明あかりに映うつつて、ちよつとでも句くが切きれ

ると、はたと顔も見えぬほどになったのである。

八

あかり
灯は水道尻のその瓦斯と、もう二ツ——一ツは、この二階から
はすつかい
斜 違な、京 町の向う角の大きな青楼の三階の、真角一
きようまち
ツ目の小座敷の障子を二枚両方へ明放した裡に、青い、が、べつ
うち
とりした蚊帳を釣つて、行 燈がある、それで。——夜目には縁
あんどう
らんかん
も欄干も物色われず、ただその映 出した処だけは、たとえば行
うかが
は
燈の枠の剥げたのが、朱塗であらう……と思われるほど定かに
しゆぬり
分る。……そこが 灰 明 いただけ、大空の雲の黒さが、此方に絞
ほのあかる
こなた

つた幕の上を、底知れぬ暗夜にする。……が、廓が寂れて、遠く
 衣紋坂あたりを一つ行く俚の音の、それも次第に近くはならず、
 途中の電信の柱があると、母衣が凧引掛りそうに便なく響が切
 れて行く光景なれば、のべの蝴蝶蝶が飛びそうな媚かしさは
 無く、荒廃したる不夜城の壁の崩れから、菜畠になった部屋が露
 出^{きだ}しで、怪しげな朧月^{おぼろづき}めく。その行燈の枕^{まくらもと}許^{もと}に、有ろう
 ？ 朱羅宇の長煙管^{ながぎせる}が、蛇になつて動きそうに、蓬^{おどろおどろ}々々と、
 曠野^{あれの}に徜徉^{さまよ}う夜の氣勢^{けはい}。地藏堂に釣つた紙帳より、かえつて侘^{わび}し
 き草^{ねや}の閨^なかな。

風の死んだ、寂^{しん}とした夜で、あたかも宙に拵げたような、蚊帳
 のその裙^{すそ}が、そよりと戦^{そよ}ぐともしないのに、この座の人の動くに

連れて、屋の棟とともに、すつと浮いて上つたり、ずうと行燈と一所に、沈んで下つたりする。

もう一つは同じ向側の、これは低い、幕の下に懸つて、真暗な門へ、奥の方から幽かに明の漏れるのが、戸の格子の目も疎に映つて、灰色に軒下の土間を茫と這うて、白い暖簾の断れたのを泥に塗らした趣がある。それと二つである。

その家は、表をずつと引込んだ処に、城の櫓のような屋根が、雲の中に陰気に黒い。両隣は引手茶屋で、それは既に、先刻中引けが過ぎる頃、伸上つて蔀を下ろしたり、仲の町の前後を見て戸を閉めたり、揃つて、家並は残らず音も無いこの夜更の空を、地に引く腰張の暗い板となつた。

時々、海老屋の大時計の面が、時間の筋を畝らして、幽な稻妻ひらに閃めき出るのみ。二階で便る深夜の光は、瓦斯がすを合わせて、ただその三つの灯ともしびとなる。

中のどれかが、折々きまぐ気紛れの鳥影の映すように、翻然ひらりと幕へ附つ着いては、一同の姿を、種々いろいろに描き出す。……

時しもありけれ、魯智深が、大なる挽ひきうす白のごとき、五分刈頭を、天井にぐるりと廻して、

「佐川さんや、」

と顔は見えず……その天井の影が動く。話の切目で、咳しわぶきの音も途絶えた時で、ひよいと見ると誰の目にも、上にぼんやりと映る、その影が口を利くかと思われる。従つて、声もがツと太く渦巻く。

「変に静まりましたな、もって来いという間の時じや、何ぞお話し下さらんか。宵からまだ、貴下あなたに限つて、一ツも凄すごいのが出ませんでな、所望ですわ。」

成程、民弥は聞くばかりで、まだ一題も話さなかつた。

「差当り心当りが無いものですから、」

とその声も暗さを辿たどつて、

「皆さんが実によく、種いろいろ々な可おそろし恐おそろしいのを御存じです。……確たしかにお聞きになつたり、また現に逢あつたり見たりなすつておいでになります。

私は、又聞きに聞いたのだの、本で読んだのぐらいな処で、それも拵こしらえものらしいのが多いんですから、差出てお話するほどの

がありません。生憎……ツても可笑いんですが、ざらある人ひとだ魂たまだつて、自分で見た事はありませんでね。怪あやしい光物といつては、鼠ねずみが啣くわえ出した鱈たらの切身が、台所でぽたぽたと黄色く光つたのを見て吃驚びっくりしたくらいなものです。お話にはなりません。けれども、嬉しがつて一人で聞かしてばかり頂いていたんでは、余り勝手過ぎます。申訳が無いようですから、詰つまらない事ですが、一つ、お話し申しましょうか。

日の暮合いに、今日、現に、此家ここへ参ります途中でした。」

「可こ恐おそい事、ちよつと、可こ恐おそくつて。」

と例の美しい若い声が身近に聞えて、ぞつとするように袖を窄すぼめた気勢けはいがある。

「私わたしに附く着ついていらつしやい。」と蘭子らんこが傍そばで、香水かおりの優やさしい薫かおり。「いや、下くだらないんですよ、」

と、慌あわてたように民弥たみぢは急いそいで断きつて、

「ちと薄うす気味けいでも悪わるいようだと、御ご愛あい嬌きやうになるんだけれど……何なんにも彼かにも、一いっ向きやう要やう領りやうを得えないんです、……時ときにだね、三さん輪りんちやん。」

とちと更あらたまつて呼よんだ時に、皆みんなが目めを灌そそぐと、どあの灯かりか、仏ぶつ壇だんに消け忘われたようなのが幽かすかに入いつて、スーと民弥たみぢのその居い直ちつた姿すがた

を映す。……これは生帷きびらの五ツ紋ごすゝもんに、白麻しろあしの襟かきを襲かきねて、袴はかまを着やくでいた。——あたかもその日、繫つながる縁者えんしやの葬とむらい式しきを見送みおくつて、その脚あしで廻まわつたそうで、時節ときせつ柄がらの礼服れいふくで宵よから同じ着附きつけが、この時際ときざい立たつて、一人、舞台ぶたいへ出でたように目に留とどまつた。麻あしは冷ひやたい、さつくりとして膚はだにも着きかず、肩かた肱ひじは凜りり々々しく武張ぶばつたが、中背ちゆうせいで瘦やせたのが、薄うすら寒ひやそうな扮装なり、襟えりを引合ひきあわせているので物優ものうしいのに、細ほそ面おもてで色いろが白しろい。座中ざちゆうでは男おとこの中の第一いっち年下ねんげの二十七にじゅうしちで、少わか々わかしいのも氣きの弱よわそうに見えるのが、今夜こんやの会かいには打うつてつけたような野辺のべ送おくりの帰かえりと云いう。

氣きのせいせいか、沈しんんで、悄しおれて見みえる処ところへ、打撞ぶつかつたその冷ひやい紋もん着つきで、水際みづぎの立たつたのが、薄うすりと一人浮出うきだしたのであるから、

今その呼懸けたお三輪さえ、声に応じて、結綿ゆいわたの綺麗な姿が、可恐こわそうな、可憐かれんな風情で、並んでそこへ、呼出されたように、座上の胸に描かれた。

「つかん事を聞くがね、どこかこの近所で、今夜あたりお産をし
そんな人はあるまいか。」

と妙な事を沈んで聞く。

「今夜……ですか。」とお三輪はきつぱり聞返す。

「……そうだね、今夜、と極きまった事も無いけれど、この頃にさ、
そういう家うちがありやしないかい。」

「嬰あかんぼ児ごが生とこれる許とこ？」

「そうさ、」

「この近所、……そうね。」

せつかく聞かされたものを、あれば可いが、と思う容子ようすで、しばらくして、

「無いわ、ちつと離れていては悪くって、江戸町辺。」

「そこらにあるかい。」

と気を入れる。

「無い事よ、——やっぱり、」とうっかりしたように澄まして言う。

「何だい、詰つまらない。」

と民弥は低声こゝえに笑えみを漏らした。

「ちよいと、階下したへ行つて、才さあちゃんに聞いて来ましようか。」

「……………」

「ええ、兄さん、」

と遣やつたが、フト黙もつて、

「私、聞いて来ましょう、先生。」

「何、可いい、それには及いばんのだよ。……いいえ、少しね、心当

りな事があるもんだから、そらね。」

と斜ななめになつて、俯うつむ向むいて幕まく張はりの裾すそから透すかした、ト酔よ覚ざの

ように、顔の色が蒼あお白しろい。

「向あうに、暗あく明かりの点ついた家うちが一軒あるだろう……近所みんなは皆閉まつ

ていて。」

「はあ、お医者様のならば、あすこは寮よ……」

「そうだ、公園近ぢかだね。あすこへ時々客では無い、町内の人らしいのが、引過ひけすぎになつてもちよいちよい出たり入つたりするから、少しその心当りの事もあるし、……何も夜中の人出入りが、お産とは極きまらないけれど、その事でね。もしかすると、そうではあるまいか、と思つたからさ。何だか余り合点のみこみ過ぎたようで妙だつたね。」

十

「それに何だか、明あかりも陰気だし、人の出入りも、ばたばたして……病人でもありそうな様子だったもんだから。」

と言つて、その明を俯向あかりうつむいて見透かす、民弥の顔にまた陰気な影が映さした。

「でもね、当りましたわ、先生、やっぱり病人があるのよ。それでもつて、寝ないでいるの、お通夜つやをして……」

「お通夜？」

と一人、縁に寄つた隅の方から、声を懸けた人がある。

「あの……」

「夜伽よしぎじゃないか。」と民弥が引取ひつとる。

「ああ、そうよ。私は昨夜ゆうべも、お通夜だつてそう言つて、才さあちやんに叱なられました。……その夜伽なのよ。」

「病人は……女じようろしゆ郎衆かい。」

「そうじゃないの。」

とついまたものいいが蓮葉はすはになつて、

「照吉さんです、知つてるでしょう。」

民弥は何か曖あいまい昧まいな声をして、

「私は知らないがね、」

けれども一座の多人数は、皆耳そぼだを敬おそてた。——彼は聞えた妓おんなで

ある——中には民弥の知らないという、その訳をさえ、よく心得たものがある。その梅次と照吉とは、待宵まつよいと後朝きぬぎぬ、と対ついくるわに廓で唄われた、仲の町の芸者であつた。

お三輪はサソクに心着いたか、急に声も低くなつて、

「芸者です、今じゃ、あの、一番綺麗な人なんです、芸も可いいの。」

可哀相だわ、大変に塩梅あんばいが悪くつて。それだもんですから、内
は角すみちよう町の水菓子屋で、出ているのは清川（引手茶屋）なんで
すけれど、どちらも狭いし、それに、こんな処ねえでしょう、落着い
て養生も出来ないからつて……ここでも大切な姉さんねえだわ。です
から皆みんなで心配して、海老屋でもしんせつにそう云つてね、四五日
前から、寮で大事にしているんですよ。」

「そうかい、ちつとも知らなかった。」と民弥はうつかりしたよ
うに言う。

「夜伽よとぎをするんじや、大分悪いな。」と子爵が向うから声を懸け
た。

「ええ、不可いけないんですつて、もうむずかしいの。」

とお三輪は口惜しくやそうに、打附ぶつけて言ったのである。

「何の病気かね。」

と言う、魯智深の頭は、この時も天井で大きく動いた。

「何んですか、性しょうがちつとも知れないんですつて。」

民弥は待構まちかまえてでもいたように、

「お医師いしやは廓くるわのなんだろう、……：：：：そう言つちや悪いけれど。」

「いいえ、立派な国手せんせいも綱つな曳びきでいらつしやつたんですの。で

もね、ちつとも分りませんとき。そしてね、照吉さんが、病気に

なつた最初はじめつから、なぜですか、もうちやんと覚悟をして、清川

を出て寮へ引移るのにも、手廻りのものを、きちんと片附けて、

この春から記つけるようにしたつちや、威張こづつていた、小遣帳かいちよう

の、あの、蜜みつ豆まめとした処なんか、棒を引いたんですつてね。赤ちゃんはそう言つて、話して、笑いながら、ほろほろ涙を落すのよ。

いつ煩つても、ごまかして薬をのんだ事のない人が、その癖、あの、……今度ばかりは、搔か卷まに凭より懸かつていて、お猪口ちよこを頂いて飲むんだわ。それがなお心細いんだつて、皆みんなそう云うの。

私も、あの、手に持つて飲まして来ます。

(三輪みちゃん、さようなら。) つて俯うつ向むくんです、……枕まくらにこぼれて束ね切れないの、私はね、櫛くしを抜ひいて密そつと解とかしたのよ……雲脂ふけなんかちつとも無いの、するする綺麗ですわ、そして煩つてから余計ふに殖ふえたようよ……髪かみばかり長くなつて、段々命いのちが縮ちぢむ

んだわねえ。——兄さん、」

と、話に実が入るとつい忘れる。

「可哀相よ。そして、いつでもそうなの、見舞に行くたんびに

(さようなら) ……」

十一

「それはもう、きれいに断念あきらめたものなの、……そしてね、幾日いくかの何時頃に死ぬんだって——言うんですとき、——それが延びたから今日はきつと、あれだつて、また幾日の何時頃だつて、どうしてでしょう。死ぬのを待っているようなの。

ですからね、照吉さんののは、きやみ氣病だって。それから大事の人の生命いのちに代つて身代みがわりに死ぬんですつて。」

「身代り、」と聞返した時、どのかまた明あかりの加減で、民弥かたびの帷かたび子が薄く映つた。且つそれよりも、お三輪の手絡てがらが、くつきりと燃ゆるように、声も強い色に出て、

「ええ、」

と言う、目も睜みはられた氣勢けはいである。

「この方が怪談じゃ、」と魯智深が寂しい声。堀子爵が居直つて、
「誰の身代りだな、情いひひと人のか。」

「あら、情いひひと人なら兄さんですわ、」

と臆おくせず……人見知ひとみしりをしない調子で、

「そうじゃないの、照吉さんののは弟さんの身代りになつたんですつて。——弟さんはね、先生、自分でも隠してだし、照吉さんも成りたけ誰にも知らさないようにしているんだけれど、こんな処の人のようじゃないの。」

学校へ通つて、学問をしてね、よく出来るのよ。そして、今じや、あの京都の大学へ行つてゐるんです。卒業すれば立派な先生になるんだわ、ねえ。先生。

姉さんもそればかりたのしみにして、地道に稼いじや、お金子かねを送つてゐるんでしよう。……ええ、あの、」

と心得たように、しかも他愛の無さそうに、

「水菓子屋の方は、あれは照吉さんの母おっかさんがはじめた店を、そ

の母さんおつかが亡くなつて、姉きょうだい二人ぼつちになつて、しようが
 無いもんですから、上州の方の遠い親類の人に来てもらつて、そ
 れが世話をするんですけれど、どうせ、あれだわ。田舎を打棄うちちや
 つて、こんな処へ来て暮そうつて人なんだから、人は好いけれど
 も商売は立行たちゆかないで、照吉さんには、あの、重荷こづけに小附こづけとかで
 すつてさ。ですから、お金子でも何でも、皆姉みんなさんがして、それ
 でも楽たのしみにしているんでしょう。

そうした処が、この二三年、その弟さんが、大變に弱くなつた
 の。困るわねえ。——試験が済めばもう卒業するのに、一昨年おととしも
 去年もそうなのよ、今年もやつぱり。続いて三年病氣をしたの。
 それもあの、随分大煩いですわ、いつでも、どつと寝るんでしょ

う。

去年の時はもう危ないって、電報が来たもんですから、姉さんが無理をして京都へ行ったわ。

二年続けて、彼地あっちで煩らったもんですから、今年の春休みには、是非お帰んなさいって、姉さんも云ってあげるし、自分でも京都の寒さが不可いけないんだって、久しぶりで帰ったんです。

水菓子屋の奥に居たもんですから、内へも来たわ。若旦那わかだんなっ

て才ちゃんが言うのよ。お父さんとっはね、お侍が浪人をしたのですって、——石橋際に居て、寺子屋をして、御新造ごしんぞうさんの方は、裁お

縫しごとを教えたんですつき、才ちゃんなんかの若い時分、お弟子よ。

あとで、私立の小学校になって、内の梅次さんも、子供の内は

上つてたんですき。お母つかさんの方は、私だつて知つてるわ。品の
いい、背せいのすらりとした人よ。水菓子屋の御新造ごしんさんつて、皆みんなが
そう言ったの。

ですもの、照吉さんは芸者だけれど、弟さんは若旦那だわね。
また煩わづらいついたのよ、困るわねえ。

そして長いながいの、どつと床に就ついてき。皆みんな、お気の毒あつちだつて、や
つぱり今の、あの海老屋の寮で養生じやうじやうをして、同じ部屋おんなだわ。まわ
り縁えんの突当りの、丸窓の付いた、池に向いた六畳よ。

照吉さんも家業があるでしょう、だもんですから、ちよいとの
隙ひまも、夜よの目も寝ねないで、附つきつ切りに看病けんびして、それでもちつと
も快よくならず、段々あんばい塩梅しんばいが悪わるくなつて、花が散る頃ときだつたわ、

お医者様もね、もうね。」

と言う、ちつと切なそうな息づかい。

十二

お三輪は疲れて、そして遣瀬やるせなさそうな声をして、

「才ちゃんさあを呼んで来ましようか、私は上手に話せませんもの。」

と言う、覚束おぼつかない娘の口から語る、照吉の身の上は、一層夜露に身に染みたのであつた。

「可いいよ、三輪みいちゃんいで沢山だ。お話し、お話し、」と雑貨店主、沢岡が激ました。

「ええ、もうちつとだわ。——あの……それでお医者様が手放したもんですから、照吉さんが一七日塩断いちしちにちしおだちして……最初はじめからですもの、断つものも外に無いの。そして願掛けをしたんですって。どこかねえ、谷中やなかの方です。遠くまで、朝ねえ、まだ夜の明けな
い内に通つたのよ。そのお庇かげで……きつとそのお庇だわ。今日にも明日にも、といった弟さんが、すっかり治つてね。夏のはじめに、でもまだ綿入を着たなりで、京都へ立つて行つたんです。

塩断をしたりなんかして、夜も寝なかつた看病疲れが出たんだつて、皆みんなそう言ったの。すぐ後で、姉さんが病みついたんでしよう。そして、その今のような大病になつたんでしよう。

ですがね、つい二三日前、照吉さんが、誰にも言わない事だけ

れどつて、そう云つて、内の才ちゃんに話したんですつて。――

あの、そのね、谷中へ願掛けをした、満願、七日目よ、……一いちし

七日ちちにちなんですもの。いつもお参りをして帰りがけに、しらしら

と夜の明ける時間なのが、その朝は、まだ真暗まつくらだったんですと

さ。御堂を拜んで帰ろうとすると、上の見上げるような杉の太木

の茂った中から、スーと音がして、ぼったり足許へ落ちて来たも

のがあるの。常燈明の細い灯あかりで、ちよいと見ると、鳥なんですつ

て、死んだのだわねえ、もう水を浴びたように悚然ぞっとして、何の

鳥だかよくも見なかつたけれど、謎々よ、……解くと、弟は助か

らないつて事になる……その時は落胆がっかりして、苔こけの生えた石燈いしどう

籠ろうにつかまつて、しばらく泣きましたつて、姉さんがね、……

それでも、一念が届いて弟が助かったんですから……思い置く事はありません、——とき。

ああ、きつとそれじゃ、……その時治らない弟さんの身代りに、自分がお約束をしたんだろう。それだから、ああやって覚悟をして死んで行くのを待っておいでだ。事によったら、月日なんかも、その時極めて頼んだのかも分らない、可哀相だ、つて才ちゃんも泣いていました。

そしてね、今度の世は、妹に生れて来て甘えよう、私は甘えるものが無い。弟は可羨うらやましい、あんな大きななりをして、私に甘ったれますもの。でも、それが可愛くつて殺されさない。前へ死ぬ方がまだ増ましだ、あの子は男だから堪こらえるでしょう、……後へ残つ

ちや、私は婦おんなで我慢が出来ないって言ったんですとき。……ちよいとどうしましょう。私、涙が出てよ。……

どうかして治らないものでしょうか。誰どなた方か、この中に、お医者様の豪えらい方はいらっしやらなくって、ええ、皆さん。」

一座ひっそり寂然した。

「まあ、」

「ねえ……」

と、蘭子と種子が言交わす。

「弱つふやったな、……それは、」とちよいと間を置いてから、子爵が
眩つふやいたばかりであつた。

「時に、」

と幹事が口を開いて、

「佐川さん、」

「は、」

と顔を上げたが、民弥はなぜかすくむようになって、からだ身体を堅くうつむ俯向いてそれまで居た。

「お話しのご続きです。——あなた貴下がその今日途中でその、何か、どうかなすったという……それから起ったんですな、三輪ちゃんの話は。」

「そうでしたね。」とぼやりと答える。

「その……近所のお産のありそうな処は無いかって、何か、そういったような事から。」

「ええ、」

とただ、腕こまぬを拱こまぬく。

「どういふ事で、それは、まず……」

「一向、詰つまらない、何、別に、」と可おそろ恐おそろしく謙遜けんそんする。

人々は促うながした。――

十三

「――気が射さしたから、私は話すまい、と思つた。けれども、行ゆ懸きがりで、揉消もみけすわけにも行かなかつたもんだから、そこで何だ。途中で見たものの事を饒舌しゃべつたが、」

と民弥は、にしかたまち西片町のその住居すまいで、安価やすかい竈かまどを背負しよつて立つ、所帯の相棒、すなわち梅次に仔細しさいを語る。……会のあつた明あくるば晩んで、夏の日を、日が暮れてからやつと帰つたが、時候あたりで、一日寝ていたとも思われる。顔色も悪く、気も沈んで、太いたく疲れているらしかった。

寒気がするとて、茶の間の火鉢かまどに對向さむかいで、

「はじめはそんな席へ持出すのに、余り榮はえな過ぎると思つたが、先刻さつきから言つた通り——三輪坊みいぼうがしたお照さんのその話を聞いてからは、自分だけかも知れないが、何とも言われないほど胸ふさが鬱ふさいだよ。第一、三輪坊が、どんなにか、可恐こわがるだろう、と思つてね。

場所が谷中だと言うんだろう、……私の出会ったのもやつぱりそこさ。——闇くらがり坂ざかを通つた時だよ。」

「はあ、」と言つて、梅次は、団扇うちわを下に、胸をすつと手を支ついた。が、黒縹くろじゆす子の引掛ひっかけ結びの帯のさがりを斜ななめにすべにる、指の白さも、団扇の色の水浅葱みずあさぎも、酒気さけけの無い、寂しい茶の間に涼し過ぎた。

民弥きんのうは寛くつろぎもしないで、端然ちやんとしながら、

「昨日きのうは、お葬とむらい式しきが後おくれてね、すっかり焼香の済んだのが、六時ちつと廻つた時分。後で挨拶をしたり、……茶屋へ引揚げて施主たちに分れると、もう七時じゃないか。

会は夜あかしなただけけれど、ゆっくり話そうって、幹事からの

通知は七時遅からず。私にも何かの都合で、一足早く。承知した、と約束がしてある。……

久しぶりのお天気だし、涼すずしいし、紋着もんつきで散歩もおかしなものだけれども、ちようど可いい。廓なかまで歩ある行いて、と家うちを出る時には思おもつたんだが、時間が遅れたから、茶屋の角で直くぐに腕車くるまをそう言いつてね。

乗のつてさ。出でる、ともう、そこらで梟ふくろうの聲こゑがする。寂寥しんとした森の下を、墓所に附ついて、薄暮合けこみいに蹴ま込かが真赤まっかで、晃々きらきら輪りんが高たかく廻まわつた、と思おもうと、早はや坂だ。——切立きつたてたような、あの闇やみがり坂、知しつてたっけか。」

「根岸から天王寺へ抜ける、細い狭い、蔽被おつかぶさつた処ところでしょう。

——近所でも芋坂の方だと、ちよいちよい通つて知つてますけれど、あすこは、そうね、たった一度。可厭な処だわね、そこでどうかなすつたんですか。」

「そうさ、よく路傍みちばたの草の中に、揃そろえて駒下駄こまげたが脱いであつたり、上の雑樹の枝に蝙蝠傘こうもりがぶら下つていたり、鉄道で死ぬものは、大概あの坂から摺すり込こむつてね。手巾ハンケチが一枚落ちていても悚ぞ然っとする、と皆みんなが言う処だよ。

昼でも暗いくれあいのだから、暮合おんなも同じきまさ。別に夜中では無し、私は何にも思わなかつたんだが、極くるまつて腕車くるまから下りる処さ、坂の上で。あの急勾配きまだから。

下りるとね、車夫わかいしはたった今乗せたばかりの処だろう、空からぐ

車くるまの氣前を見せ、一つひと駆がけで、顛はちまき卷の上へ梶かじ棒ぼうを突上げ
 勢いきおいで、真ま暗くらな坂へストーンと摺す込んだと思おもうと、むつくり線路
 の真まん中なかを躍り上つて、や、と懸つ声だ。そこはまだ、仄ほんり明あい、
 白しろつぽい番小屋の、蒼あおい灯ひを衝つと切つて、根岸の宵の、螢あせのよう
 な水みづ々みづした灯あかりの中へ消き込んだ。
 蝙蝠こうもりのように飛ぶんだもの、離れ業と云つて可い速いさなんだ
 から、一人でしばらく突つ立たつて見ていたがね、考かえて見ると、面
 白しろくも何とも無いのさ。

足許だけぼんやり見える、黄た昏その木この下した闇やみを下り懸かけた、
 暗くさは暗くいが、氣せは晴せい々せいする。

以前と違つて、それから行く、……吉原には、恩愛もなし、義

理もなし、借もなし、見得外間があるじやなし……心配も苦勞も無い。叔母さんに貰もらった仲の町の江戸絵を、葛籠つづらから出して頬ほお杖えを支ついて見るようなもんだと思つて。」

十四

「坂の途中で——左側の、」

と長火鉢の猫板をおき圧おさえて言う。

「樹の根が崩れた、じとじと湿ぬっぽい、赤土の色が蚯蚓みみずでもかたま団まつたように見えた、そこにね。」

「ええ」

と梅次は眉を顰めた。

「大丈夫、蛇の話じゃ無い。」とこれは元気よく云つて、湯呑で一口。

「人が居たのさ。ぼんやりと小さく蹲んで、ト目に着くと可厭な臭気がする、……地へ打坐つてでもいるかぐらい、ぐしやぐしやと挫げたように揉潰した形で、暗いから判然せん。

が、別に気にも留めないで、ずっとその傍を通抜けようとして、ものの三足ばかり下りた処だった。

(な、な、)と言う。

雪駄直しだか、唾だか、何だか分らない。……聞えたばかり。

無論、私を呼んだと思わないから、構わず行こうとすると、

(なあ、)と、今度はちつとぼやけたが、大きな声で、そして、

(袴着^{はかま}た殿い、な、)と呼懸ける、確かに私を呼んだんだ。どこ

の山家^{やまが}のものか知らんが、変な声で、妙なもののいいき。「袴着た

、」と言うのか、「墓場来た、」と言うのか、どつちにしても

「殿」は氣障^{きざ}だ。

が、確^{たしか}に呼留めたに相違無いから、

(俺^{おれ}か。)

(それよ、)……と、気になる横柄な返事をして、もやもやと背

伸びをして立った……らしい、頭^{つむり}を擡^{もた}げたのか、腰^{こし}を起^たてたのか、

上^{うえ}下^{した}同じ^{おんな}ほどに胴^{どう}中^{なか}の見えたのは、いづれ大分^との年^{とし}紀^しらしい。

爺^{じい}か、婆^{ばあ}か、ちよつと見には分らなかつたが、手^{てぬぐい}拭^{ぬぐ}だらう、

頭にこう仇白あだしろいやつを畳んで載せた。それが顔に見えて、面は俯向けうつむにしながら、杖つえを支ついた影は映らぬ。

(殿、な、何処いずくへな。)

と、こうなんだ。

私は黙なつて視ながめたつけ。

じつと身動きもしないで、返事を待っているようだからね、

(吉原へ。)

と綺麗に言ったが、さあ、以前なら、きつとそうは言わなかつたろう。その空がさっぱりと晴々した心持だから、誰はに憚ばる処かも無い。おつけ晴れたのが、不思議に嬉しくもあり、また……幼りい簡けんだけれども、何か、自分でも立派に思った。

(真北じゃな、ああ、)

とびくりと頷うなずいて、

(火の車で行ゆかさるか。)

馬鹿にしている、……此こいつ奴は高利貸か、

烏からすがね金を貸す爺じじ婆ばば

だろうと思つたよ。」

と民弥は寂さみしそうなが莞にっこり爾りした。

梅次がちつと仰あおむ向むくまで、真顔で聞いて、

「まったくだわねえ。」

「いや、」

民弥は、思出したように、室へやの内なかをみまわしながら、

「烏金……と言えば、その爺婆は、荒縄で引ひ括くって、烏の死ん

だのをぶら下げていたのよ。」

梅次は胸を突かれたように、

「へい、」と云つて、また、浅葱あさぎのその団扇うちわの上へ、白い指。

「堪たまらない。幾日いくかた経たつたんだか、べろべろに毛が剥はげて、羽がぶらぶらとやつと繋つながつて、地じへ摺すれて下くだつてさ、頭たまなんざ爛ただれたようにべとべとしている、その臭にお気いだよ。何とも言えず変たに悪臭あくしゅういのは、——奴やつの身体からだでは無い。服装みなりも汚みくはないんだね、折目しわの附ついたと言いいたいが、それよりか、皺しわの無いと言いつた方が適あい、坊ぼくさんか、尼あまのような、無地むぢの、ぬべりとしたのでいた。

まあ、それは後での事。

(何の車？……)と聞返した。

（森の暗さを、真赤なものが、めいらめいら擱からんで、車が飛んだでやいの。恐ろしやな、活いきながら鬼ひが曳ひくさを見るかいや。のう殿。私わしは、これい、地板じびたへ倒りようとしたがいの。……うふツ、）と腮あごの震えたように、せせら笑ったようだつけ、——ははあ……」

十五

「今の腕車くるまに、私が乗っていたのを知って、車夫わかいしが空からで駆下りた時、足の爪を轆ひかれたとか何とか、因縁を着けて、端銭はしたを強請ゆするんであろうと思った。

しかし言種いいぐさが変だから、

(何の車?) ともう一度……わざと聞返しながら振返ると、

(火の車、)

と頭から、押冠おつかぶせるように、いやに横柄に言つて、もさりと
歩行あるいて寄る。

なぜか、その人を咒のろつたような挙動しぐさが、無体に癩しやくに障さつたろう。

(何の車?) と苛々いらいらとしてこちらも引返した。

(火の車、)

じりじりとまた寄つた。

(何の車?)

(火の車、)

(火の車がどうした。)

とちようど寄合わせた時、少し口惜くやしいようにも思つて、突つ懸かつて言つた、が、胸おきを圧おさえた。可いや厭やなその臭にお気いつたら無いもの。

(私わしに貸かさい、の、あのや、燃からえ擲ちまつた車で、逢おう魔まケ時に、真北へさして、くるくる舞まいして行ゆかざるは、少わかい身みに可ようないが
いや、の、殿とん、……私わしに貸かさい。車借かりて飛とばしたい、えらく今日けふは足あしがなえたや、やれ、の、草くた臥たりたいの、やれやれ、)

と言つて、握にぎりこぶし拳こぶしで腰こしをたたくのが、突つ着くけて、ちようど私の胸むねの処ところ……というものは、あの、急いそな狭せまい坂さかを、奴やつは上うへの方に居ゐるんだらう。その上、よく見ると、尻しりをこつちへ、向むかうむきに屈かがんで、何か言いつてゐる。

かつたいぼううち
癩に棒打、喧嘩にもならんではないか。

(どこへ行くんだい、そして、) ツて聞いて見た。

(同じ処への、)

(吉原か。)

(さればい、それへ。)

とこう言う。

(何しに行くんだね。)

(取揚げに行く事よ。)

ああ、産婆か。道理で、と私は思った。今時そんなのは無いかも知れんが、昔の産婆さんにはこんな風なのが、よくあつた。何だか、薄気味の悪いような、横柄で、傲慢で、人を舐めて、一

切心得た様子を、檀那寺の坊主、巫女などと同じ様子で、頼む人から一目置かれた、また本人二目も三目も置かせる氣。昨日のその時なんか、九目という応接です。

なぜか、根性曲りの、邪慳な残酷なもののように、……絵を見てもそうだろう。産婦が屏風の裡で、生死の境、恍惚と弱果てた傍に、襷掛けの裾端折か何かで、ぐなりとした嬰兒を引搦んで、盥の上へぶら下げた処などは、腹を断割つたと言わないばかり、意地くねの悪い姑の人相を、一人で引受けた、という風なものだつけ。

吉原へ行くと云う、彼処等じゃ、成程頼みそうな昔の産婆だ、とその時、そう思ったから、……後で蔦屋の二階で、皆に話をす

る時も、フツとお三輪に、（どこかお産はあるか）って聞いたんだ。

もうそう信じていた。

でも、何だか、肝かんが起たつて、じりじりしてね、おかしく自分でも自棄やけになつて、

（貸すなおしてやろう、乗つといで。）

（柔順すなおなものじゃ、や、よう肯きかしやれたの……おおお。）と云しりつて臀しりを動かす。

変なものをね、その腰へ当てた手にぶら下げているじゃないか。

——鳥しがいの死骸しがいだ。

（何にする、そんなもの。）

(まじない禁厭にする大事なもののいの、これが荷物じや、火の車に乗せ

ますが、やあ、殿。)

(たま堪らない！ 臭くつて、)

と手ハンケチ巾へ唾を吐いて、

(車賃は払っておくよ。)

で、ファイと分れたが、さあ、踏切を越すと、今の車はどこへ行
ったか、そこに待っている筈はずのが、まるで分らない。似たやつど
ころか、また近所に、一台も腕車くるまが無かった。……

変じゃないか。」

しばらくして、

「お三輪が話した、照吉が、京都の大学へ行ってる弟の願懸けに行つて、堂の前で気落きおちした、……どこだか知らないが、谷中の辺で、杉の樹の高い処から鳥が落ちて死んだ、というのを聞いた時、……何の鳥とも、照吉は、それまでは見なかつたんだそうだけれども、私は何だよ……」

思わず、心が、先刻さつきの暗がり坂の中途へ行つて、そのおかしな婆々ばばあが、荒縄でぶら提げていた、腐った鳥の事を思ったんだ。照吉のも、同じ鳥じゃ無かろうかと……それに、可なり大きな鳥だというし……いいや！」

梅次のその顔かおつき色を見て、民弥はおさ圧えるように、

「まさか、そんな事はあるまいが、ただそこへ考えが打撞ぶつかつただけなんだよ。……

だから、さあ、可厭いやな気持だから、もう話さないでおきたかつたんだけれども、話しかけた事じゃあるし、どうして、中途から弁舌で筋を引替えようという、器用なんじゃ無い。まじまじ遣やつた……もつとも荒ツぽく……それでも、鳥の死骸を持っていたツて、そう云うと、皆みんなが妙に気にしたよ。

お三輪は、何も照吉のが鳥だとも何とも、自分で言ったのじや無いから、別にそこまでは気を廻さなかつたと見えて、暗号あいずに袖を引張らなかつた。もうね、可愛いんだ、——ああ、可恐こわい、と

思うと、極きまつたように、私の袂たもとを引張ひっぱたつけ、しつかりと持つて——左の、ここん処すわに坐すわつていて、

と猫板の下になる、膝のあたりを熟じつと視みた。……

「煙管きせる？」

「ああ、」

「上げましょう。……」

と、トンと払はたいて、

「あい。……どうしたんです、それから、可厭いやね、何だか私は、」
と袖を合わせる。

「するとだ……まだその踏切を越えて腕車くるまを搜たづなつてまでも
行ゆかず……其奴そいつの風采ふうつきなんぞ悉くわしく乗出して聞くのがあるから、

私は薄暗がりの中だ。判然とはしないけれど、朧おぼろげ気に、まあ、見ただけをね、喋しゃべ舌つつてる中うちに、その……何だ。

向う角の女郎屋じよろやの三階の隅に、真暗まつくらな空へ、切つて嵌はめて、裾すそをぼかしたように部屋へ蚊帳かやを釣つて、寂然しんと寝ているのが、野原の辻堂しちやうに紙帳しちやうでも掛けた風で、恐しくさびれたものだ、と言つたつけ。

その何だよ。……

蚊帳の前へ。」

「ちよいと、」と梅次は、瘉ひつつ攣つるばかり目を睜みはつて膝をずらした。

「大丈夫、大丈夫、」

と民弥はまたわずかに笑えみを含みつつ、

「仲の町越しに、こちらの二階から見えるんだから、丈が……そうさ、人にして二尺ばかり、一寸法師ツか無いけれど、何、普通で、離れているから小さいんだろう。……婆さんが一人。」

大きな蜘蛛くもが下りたように、行燈あんどうの前へ、もそりと出て、蚊帳の前をスーと通る。……擦れ擦れに見えたけれども、縁側を歩あ行いたろう。が、宙を行くゆようだ。それも、黒雲の中にある、青田のへりでも伝うツて形でね。

京町の角の方から、水道尻の方へ、やがて、暗い処へ入って隠れたのは、障子の陰か、戸袋の背後うしろになつたらしい。

遣手やりてです、風が、大引前おおびけまえを見廻つたろう。

それが見えると、鉄棒かなぼうが遠くを廻つた。……カラカラ、……

カンカン、何だか妙だね、あの、どうか言うんだっけ。」

「チャン、カン、チャンカン……ですか。」と民弥の顔を瞻めながら、軽く火箸ひばしを動かしたが、鉄瓶にカタンと当たった。

「あ、」

と言つて、はつと息して、

「ああ、吃びっくり驚した。」

「ト今度は、その音に、ずツと引着けられて、廓くるわじゆう中の暗い処、暗い処へ、連れて歩ある行くか、と思うばかり。」

「話してる私も黙れば、聞いている人たちも、ぴったり静まる：
：

と遣手やりてらしい三階の婆々ばばあの影が、蚊帳の前を真暗まっくらな空の高い
処で見えなくなる、——とやがてだ。

二三度続け様に、水道尻居まわりの屋根やねぢか近な、低い処で、鴉からすが
啼ないた。夜鳥も大引けの暗夜やみだろう、可厭いやな声といったら。

すたすたとけたたましい出入りの蹺音あしおと、四ツ五ツ入乱れて、
駆出す……馳はしりこ込むといったように、しかも、なすりつけたよう
に、滅入めいって、寮の門かどが慌あわしい。

私の袂たもとを、じつと引張って、

(あれ、照吉姉ねえさんが亡くなるんじやなくツて) ツて、少し震え

ながらお三輪が言うと、

(引潮時だねちようど……)と溜息ためいきをしたは、油絵の額縁こしらを拵こしらえる職人風の鉄拐てつかな人で、中での年寄だった。

おんな
婦人の一人が、

(姉さん、姉さん、)

と、お三輪を、ちようどその時だった、呼んだのが、なぜか、気が移って、今息を引取ろうという……照吉の枕許に着いていて言うような、こよう堅くなつた沈んだ声だった。

(ははい、)

とこれも幽かすかにね。

浜谷ツて人だ、その婦人は、お蘭さんというのが、

(内にお婆さんはおいでですか。)

と聞くじやないか。」

「まあ、」と梅次は呼吸いきを引く。

民弥しずかは静きせるに煙管を置いて、

「お才さんだつて、年じやあるが、まだどうして、姉あねえで通る、

……婆さんという見当では無い。皆みんな、それに、それだと顔は知っ

ている。

女中がわりに送おくりむかえ迎むかひをしている、前ぜんに、それ、柳橋の芸者だ

つたという、……耳の遠い、ぼんやりした、何とか云う。」

「お組さん、」

「粹いきな年増としまだ、可哀相に。もう病氣であんなになつてはいるが……

…だって白髪しろがの役じや無い。

(いいえ、お婆さんは居ませんの。)

(そう……)

と婦人が言つたつけ。附着くつつくようにして、床の間の傍わき正面しょうめんにね、丸窓を背負しょつて坐つていた、二人、背後うしろが突抜はしごけに階子だ段んの大きな穴だ。

その二人、もう一人のが明座ツてやつぱり婦人で、今のを聞くと、二言ばかり、二人で密ひそひそ々と言つたが否や、手を引張ひっぱりあ合つた様子で、……もつとも暗くつてよくは分らないが。そしてスーと立つて、私の背後うしろへ、足袋の白いのが颯さつと通つて、香水の薫かおりが消えるように、次の四畳を早足でもつて、トントンと階下したへ下り

た。

また、皆^{みんな}黙ったつけ。もつとも誰が何をして、どこに居るんだか、暗いから分らない。

しばらく、袂^{たもと}の重かったのは、お三輪がしつかり持つてるらしい。

急に上^{あが}つて来ないだろう。

(階^{した}下じや起きているかい。)

(起きてるわ、あの、だけど、才^{さあ}ちゃんは照吉さんの許^{ところ}へちよつと行つてるかも知れなくつてよ。)

(何は、何だつけ。)

(お組さん、……ええ、火鉢の許^{ところ}に居てよ。でも、もうあの通り

でしょう、坐いねむり眠むをしていられるかも知れないわ。」

（三輪ちゃんか、ちよつと見てあげてくれないか、はばかりが分らないのかも知れないぜ。」と一人気を着けた。

（ええ、）

てツたが、もう可こ恐おそくツて一人では立てません。

もう一ツ、袂たもとが重おもくなつて、

（一所に……兄あにさん、）

と耳みみの許とこへ口くちをつける……頬ほ辺ぺたが冷ひやりとするわね、鬢びんの毛けで。それだけ内証ないしよのつもりだろうが、あの娘こだもの、皆みんな聞きえるよ。

（ちよいと、失礼しつれい。）

（奥方に言いいつけますぜ。」と誰たれか笑わらった、が、それも陰気かげさ。」

十八

「暗い階子はしごをすつと抜ける、と階下したは電燈でんきだ、お三輪さんりんは颯さつと美しい。

見ると、どうです……二階から下して来て、足の踏場かども無かつた、食物、道具なんか、掃いたように綺麗に片附いて、門かどを閉めた。節穴あかりへ明あかりが漏れて、古いから森しとみのよう、下した藪うしろを背後うしろにして、上あがりがままちの、あの……客受まもけの六畳むつじやうの真中まんなかへ、二人、お太鼓おたいこの帯おびで行儀ぎよよく、まるで色紙いろしへ乗ったようですね、ける、かな、と端然きちんと坐まつてると、お組ぐみが、精々せいせい気を利きかしたつもりか何

かで、お茶台に載つかつて、ちゃんとお茶がその前へ二つ並んで
います……

お才さんは見えなかつた。

ところが、お組があれだろう。男なら、骨こつでなり、勘かんでなり、
そこは跋ばつも合わせようが、何の事は無い、松葉ヶ谷やつの尼寺へ、振
袖わかしゆの若衆わかしゆが二人、という、てんで見当の着かないお客に、不意
に二階から下りて坐られたんだから、ヤ、妙な顔で、きよとんと
して。……

次の茶の室まから、敷居際まで、擦ずりだ出して、煙草盆たばこぼんにね、一つ
火を入れたのを前に置いて、御丁寧ごていねいに、もう一つ火入ひいれに火を入れ
ている処じや無いか。

座蒲団ざぶとんは夏冬とも残らず二階、長火鉢の前の、そいつは出せず

失礼と、……煙草盆を揃えて出した上へ、団扇うちわを二本の、もうち
つとそのままにしておいたら、お年玉の手拭てぬぐいの残ったのを、上
包みのまま持つて出て、別々に差出そうという様子でいる。

さあ、お三輪の顔を見ると、嬉しそうに双方を見較べて、吻ほっと
一呼吸ひといきを吐いた様子。

(才ちゃんは、)

とお三輪が、調子高に、直ぐに聞くと、前さきへ二つばかりゆつく
りと、頷うなずき頷き、

(姉さんは、ちよいと照吉さんの様子を見に……あの、三輪ちや
ん。)

と戸棚へ目を遣^やつて、手で円いものをちらりと拵^{こしら}えたのは、菓子鉢へ何か？ の暗号^{あいず}。」

ああ、病気に、あわれ、耳も、声も、江戸の張^{はり}さえ抜けた状^{さま}は、糊^{のり}を売るよりいじらしい。

「お三輪が、笑止そうに、

(はばかりへおいでなすつたのよ。)

お組は黙^{かぶり}つて頭を振るのさ。いいえ、と言うんだ。そうすると、成程二人は、最初^{はじめ}からそこへ坐り込んだものらしい。

(こちらへいらつしやいな。)とその一人が、お三輪を見て可^{なつか}懐しそうに声を懸ける。

(佐川さん、)

と太く疲れたらしく、弱々とその一人が、もつとも夜更しのせいもあるう、髪もぱらつく、顔色も沈んでいる。

(どうしたんです。)と、ちようど可い、その煙草盆を一つ引攫って、二人の前へ行つて、中腰に、敷島を一本。さあ、こうなると、多勢の中から拔出したので、常よりは気が置けない。

(頭痛でもなさるんですか、お心持が悪かったら、蔭へ枕を出させましょうか。)

(いいえ、別に……)

(御無理をなすつちや不可ません。何だかお顔の色が悪い。)

(そうですね。)とお蘭さんが、片頬を殺ぐように手を当てる。

(ねえ、貴方、お話ししましょう。)

(でも……)

(ですがね、)

とちらちらと目くばせが閃めく、——言おうか、言うまいかつて素振そぶりだろう。

聞かずにはおられない。

(何です、何です、)

と肩を真中まんなかへ挟むようにして、私が寄る、と何か内証ないしよの事とでも思つたらう、ぼけていても、そこは育ちだ。お組が、あの娘こに目で知らせて、二人とも半分閉めた障子の蔭へ。ト長火鉢のさしの向いに、結綿ゆいわたと円鬚まげが、ぽつと映つて、火箸が、よろよろとして、鉄瓶がぽつかり大きい。

お種さんが小さな声で、

(今、二階からいらつしやりがけに、物干の処で、)

とすこし身を窘めて、一層低く、

(何か御覧なさはしませんか。)

私は悚然とした。」

十九

「が、わぎと自若として、

(何を、どんなものです。) って聞返したけれど、……今の一言
で大抵分った、婆々が居た、と言うんだらう。」

「可厭、」と梅次は色を変えた。

「大丈夫、まあ、お聞き、……というものは——内にお婆さんは居ませんか——ツて先刻お三輪に聞いたから。……

はたして、そうだ。

（何ですか、お婆さんらしい年寄が、貴下、物干から覗いていますよ。）

とまた一倍減入った声して、お蘭さんが言うのを、お種さんが取繕うように、

（気のせいかも知れませんが、多分そうでしょうよ……）

（いいえ、確なの、佐川さん、それでね、ただ顔を出して覗くんじゃありません。梟見たように、膝を立てて、蹲んでいて、窓の

敷居の上まで、物干の板から密と出たり、入ったり、)

(ああ、可厭だ。)

と言つて、揃つて二人、ぶるぶると掃消すように袖を振るんだ。

その人たちより、私の方が堪りません。で無くつてさえ、蚊帳の前を伝わった形が、昼間の闇がり坂のに肖ていて堪らない処だもの、……鳥は啼く……とすぐにあの、寮の門で騒いだらう。

気にしたら、どうして、突然ポンプでも打撒けたいくらいな処だ。

(いつから?……)

(つい今しがたから。)

(全体前ぜんにから、あの物干の窓が気になつてしようがなかつたんですよ。……時々、電車のですかね、電いなびかりですか、薄い蒼あおいのが、真まっくら暗くらな空へ、ぼつと映さしますとね、黄色くなつて、大きな森が出て、そして、五重の塔の突とつさき尖さきが見えるんですよ……上野でしょうか、天竺てんじくでしょうか、何にしても余程遠くで、方角が分りませんほど、私たちが見て凄すごかつたんです。

その窓に居るんですもの。)

(もつとお言いなさいよ。)

(何です。)

(可いや厭やだ、私は、)

(もつとは?)

(貴女^{あなた}おっしやいよ、)

と譲合つた。トお種^とさんが、障^{となり}のお三輪にも秘^{かく}したそうに、

(頭にね、何ですか、手^{てぬぐい}拭^いのようなものを、扁^{ひらつ}たく畳^{たた}んで載^のせ

ているものなんです。貴下^{あなた}がお話^{はな}しの通りなの、……佐川^{さか}さん。)

私は口^{くち}が利^きけなかつた。——無暗^{むやみ}とね、火入^{ひいれ}へ巻^まきたばこ^{ばこ} 莨^{らう}をこす

り着^きけた。

お三輪^{さんりん}の影^{かげ}が、火鉢^{ひばち}を越^こして、震^ゆえながら、結^{ゆい}綿^{わた}が円鬚^{まげ}に附^く

着^ついて、耳^{みみ}の傍^{はた}で、

(お組^{くみ}さん、どこのか、お婆^{おば}さんは、内^{うち}へ入^いつて来^きなくツて?)

(お婆^{おば}さん……)

とぼやけた声^{こゑ}。

（大きな声をおしでないよ。）

と焦しれったそうにたしなめると、大きく合点がってん々々しながら、

（来ましたよ。）

ときよんとして、仰向いて、鉄瓶を撫なでて澄まして言うんだ
「」。

「来たの、」

と梅次が蘇よみがえ生えった顔になる。

「三人が入乱れて、その方へ膝を向けた。

御注進の意気込みで、お三輪も、はらりとこつちへ立って、と
んと坐って、せいせい言つて、

（来たんですって。ちよいと、どこの人。）

と、でも、やっぱり、内証で言った。

胸から半分、障子の外へ、お組が、皆が、みんな油へ水をさすような

澄ました細ほそおもて面の顔を出して、

(ええ、一人お見えになりましたですよ。)

(いつさ?)

(今しがた、可いや厭な鴉からすが泣きましたろう……)

いや、もうそれには及ばぬものはまた意地悪く聞える、と見える。

(照吉さんの様子を見に、お才はんが駆出して行きなすった、門かどを開放あけはなしたまんまでさ。)

みんな皆が振向いて門を見たんだ。」——

二十

「その癖門かどの戸は閉しまっている。土間が狭いから、下駄が一杯ステッキ、杖コウモリ、洋傘コウモリも一束。大勢余り隙あひまだから、歩行出あるきだしたように、もぞりもぞりと籐とうおもて表の目や鼻緒なすぢなんぞ、むくむく動く。

この人数が、二階たてこもに立籠たてこもる、と思うのに、そのまた静しずかさといつたら無い。

お組がその儀は心得た、という顔で、

(後で閉めたんでございますがね、三輪みいちゃん、お才はんが粗そそ々そそかしく、はあ、)

と私達を見て莞爾にっこりしながら、

（駆出して行きなすった、直き後でございますよ。入違いぐらいに、お年寄が一人、その隅すみこから、扁平ひらべつたいような顔を出して覗のぞいたんでございますよ。

何でも、そこで、お上かみさんに聞いて来た、とそう言いなすったようでしたつけ……すたすた二階へお上あがりでございました。）
 さ、耳の疎うといというものは。

（どこの人よ、）

とお三輪が擦寄せきこつて、急せきこ込んで聞く。

（どこのお婆さんですか。）

（お婆さんなの、ちよいと……）

私たちが訊ねたい意は、お三輪もよく知っている。闇がり坂以來、気になるそれが、爺とも婆とも判別が着かんじやないか。

(でしようよ、はあ、……余程の年紀ですから。)

(いいえさ、年寄だつてね、お爺さんもお婆さんもありますツさ。)

(それがね、それですがね三輪ちゃん。)
と頭を掉つて、

(どつちだかよく分りません。背の低い、色の黄色蒼い、突張つた、硝子で張つたように照々した、艶の可い、その癖、随分よぼよぼして……はあ、手拭を畳んで、べつたり被つて。)

女たちは、お三輪と顔を見合させた。

（それですが、どうかしましたか。）

（どうもこうもなくつてよ……）とお三輪は情ない声を出す。

（不可^{いけ}ませんでしたかねえ。私はやつぱり会にいらした方が、
と思つて。）

……成程な、」

と民弥は言い掛けて苦笑した。

「会へいらしたには相違は無い。

（今時分来る人があつて、お組さん。もう二時半だわ。）

（ですがね、この土地ですし……ちよいと、御散歩にでもお出掛
けなすつたのが、帰つて見えたかとも思いましたし……お怪^{ばけ}の
話をする、老^{としより}人は居ないかツて、誰^{どなた}方かお才はんに話しをして

おいでだったし、どこか呼ばれて来たのかとも、後でね、考えた事ですよ。いえね、そんな汚い服装なりじゃありません。茶がかつた鼠色の、何ですか無地もので、皺しわのないのを着てでした。

けれども、顔で覗いてその土間へお入んさすつた時は、背後向うしろきでね、草履でしよう、穿はきもの物を脱いだのを、突いきなり然ふと懐ころ中へお入れなさるから、もし、ツて留めたんですが、聞かぬ振ふりで、そして何です、そのまんま後びつしやりに、ずるツかずるツかそこを通つて、)

と言われた時は、揃つて畳の膝を摺すらした。

(この階はしご子段の下から、向直つてのつそりのつそり、何だか不ぶ躑しつけらしい、きつと田舎のお婆さんだろうと思ひました。いけ強

情な、意地の悪い、高慢なねえ、その癖しよなしよなしで、どう
 でしょう、可おそろし恐い裾すそなが長で、……地じへ引摺るんでございませうよ。

すそはしより

裾端折を、ぐるりと揚げて、ちよいと帯の処へ挟んだんです
 がねえ、何ですか、大きな尻尾を捲まいたような、変な、それは様
 子なんです。……

おや、無むめんもく面目だよ、

人の内へ、穿はきもの物を懐へ入れて、裾端折

のまんま、まあ、随分なのが御連中の中に、とそう思っていたん
 ですがね、へい、まぐれものなんでございませうかい。)

わなわな震えて聞いていたつけ、堪たまらなくなつた、と見えてお

三輪は私に縋すがり着いた。

いや、お前も、可恐おっかながる事は無い。……

もう、そこまですると、さすがにものの分った姉さんたちだ、お蘭さんもお種さんも、言合わせたように。私にも分った。言出して見ると皆同おんなじ一。……

二十一

「茶番さ。」

「まあ！」

「誰か趣向をしたんだね、……もつとも、昨夜ゆうべの会は、最初から百物語に、白装束や打散ぶつちらし髪がみで人を怯おどかすのは大人気無い、素す

にしよう。——それで、電燈でんきだつて消さないつもりでいたんだから。

けれども、その、しないという約束の裏うらを行くのも趣向しゅきやうだろう。集つた中にや、随分娑婆しゃば婆ば気けなものも少くない。きつと誰かが言合ごうわせて、人を頼んだか、それとも自から化けたか、暗い中から密みつと摺すり抜ぬける事は出来たんだ。……夜は更けたし、潮時を見計らつて、……たしか確たしかにそれに相違ちがひ無い。

トそういう自分が、事に因ると、茶番の合あひ棒ぼう、発頭ほつとう人にんと思おもわれているかも知れん。先刻さつき入つたという怪しい婆ば々あが、今現いまに二階にがいに居て、傍はたでもその姿を見たものがあるとすれば……似たよ
うなもの事を私が話したんだから。

(誰かの悪戯いたずらです。)

(きつとそう、)

と婦人おんなだちも納得した。たちまち雲霧が晴れたように、心持もさっぱりしたろう、急に眠気ねむけが除れたような気がした、勇氣は一倍。

怪けしからん。鳥の羽おびやに怯おびかされた、と一の谷にげこに遁にげ込んだが、緋ひの袴はかままじりに鶉ひよどりご越こえを逆寄さかよせに盛返さかす……となると、お才さいさんはまだ帰かえらなかつた。お三輪さんりんも、恐こわいには二階にがいが恐こわい、が、そのまま耳みみの疎うといのと差さ対たいいじやなお遣切やりきれなかつたか、また袂たもとが重おもくなつて、附く着ついて上あります。

それでも、やつぱり、物干ものの窓まどの前まへは、私わたしはじめ悚然ぞつとしたつ

け。

ばたばたと忙せわしそうに皆坐みんなった、旧もとの処へ。

で、思い思いではあるけれども、各めいめい自暗まじがりの中を、こう、
 ……不気味ものずきも、好事まじも、負けない気も交まじつて、その婆々ばばあだか、
 爺々じじいだか、稀有けぶな奴やつは、と透とおかした。が居まない……」

梅次が、確めるように調子をおき圧おさえて、

「居まないの、」

「まあ、お待ち、」

と腕を組んで、胡坐あぐらを直して、伸上ひとつて一呼吸いきした。

「そこで、連中は、と見ると、いやもう散々の為ていたらく体たい。時間ときが
 時間だから、ぐったり疲切ずりつて、向うの縁側へ摺出すりだして、欄干てすりに

臂ひじを懸かけて、夜風に当あつてゐるのなどは、まだ確たしかな分ぶんで。突つ臥ぶしたんだの、俯うつむ向むいたんだの、壁かべで頭あたまを冷ひやしてゐるのもあれば、煙きせる管くだで額つっかいぼうへ突つ支し棒ぼうをして、暈のへめつたようなものもある。……夜汽車よきしやが更あけて美み濃のと近おうみ江みの国くに境さかい、寢ね覚ざめの里さととでもいう処ところを、ぐらぐら揺ゆつて行ゆくようで、例れいの、大きな腹はらだの、瘦やせた肩かただの、帯おビだの、胸むねだの、ばらばらになつたのが遠と灯あかりで、むらむらと一面いちめんに浮たいて漾たう。

(佐川さん、)

と囁ささやくように、……幹事かんじだけに、まだしつかりしてゐた沢岡さわおかでね。やっぱり私の隣となりりに坐まつたのが、

(妙なものをお目に懸かけます。)

(え、)

それ、婆々か、と思うとそうじや無い。

(縁側の真中の——あの柱に、凭懸ったのは太田(西洋画家)

さんですがね、横顔を御覧なさい、頬がげっそりして面長で、

心持、目許、ね、第一、髪が房々と真黒に、生際が濃く……

灯の映る加減でしょう……どう見ても婦人でしょう。婦人も、産

後か、病上りてった、あの、凄^{すこ}い蒼白^{あおしろ}さは、どうです。

もう一人、)

と私の脇の下へ、頭を突込むようにして、附着いて、低く透か

して、

(あれ、ね、床の間の柱に、仰向けに凭れた方は水島(劇評家)

さんです。フト口を開きあか何か、寝顔はというたしなみ躡で、額から顔へ、ぺらりと真白まっしろは手巾ハンケチを懸けなすつた……目鼻も口も何にも無い、のつぺらぼう……え、百物語に魔まが魅さすつて聞いたが、こんな事を言うんですぜ。）

ところが、そんなので無いのが、いつか魅さし掛けていたので気になる……」

二十二

「そうすると、趣向をしたのはこの人では無いらしい、企謀もくろんだものなら一番懸かけに、婆ばばあ々あを見着みけそうなものだから。

(ねえ、こつちにもう一つ異体いいていなのは、注連しめでも張りそうな裸のお腹、……)

(何じゃね、)と直きに傍そばだったので、琴の師匠は聞着けたが、(いいえ、こちらの事で。)幹事が笑うと、欠伸あくびまじりで、それなり、うとうと。

(まあ、これは一番正体が知れていますが、それでも唐突だしぬけに見ると吃驚びっくりしますぜ。で、やっぱりそれ、燭台しよくだいの傍わきの柱はしらに附つく着いて胡坐あぐらでき。妙に人相形ぎようてい体ていの変つたのが、三つとも、柱の処ところですからね。私も今しがた敷居際しきいの、仕切の壁の角を、摺出ずりだした処ところですよ。

どうです、心得こころえているから可いいようなものの、それでいながら

変に凄^{すご}い。気の弱い方が、転寝^{うたたね}からふつと覚^{さめ}際に、ひよつと一目見たら、吃驚^{びつくり}しますぜ。

魔物もやつぱり、蛇や蜘蛛^{くも}なんそのように、鴨居^{かもい}から柱を伝つて入つて来ると見えますな。）

（可厭^{いや}ですね。）

婦人は二人、颯^{さつ}と衣紋^{えもん}を捌^{さば}いて、櫥子^{れんじまど}窓の前を離れた、そこにも柱があつたから。

そして、お蘭さんが、

（ああ、また……開^あいていますね。）

と言うんだ。……階下^{した}から二階へ帰掛^かけに、何の茶番^{はま}が！ で、私がぴつたり閉めた筈^{はず}。その時は勿論、婆々^{ばば}も爺々^{やぢ}も見えなかつ

た、——その物干の窓が、今の間に、すかり、とこう、切放したように、黒雲立って開あいている。

お種さんが、

（はばか 憚り様、どうかそこをお閉め下さいまし。）

こう言つて声を懸けた。——誰か次の室まの、その窓際に坐つているのが見えたんだろう。

お聞き……そうすると……壁腰、——幹事の沢岡が氣にして摺すり退いたという、敷居外の柱の根の処で、

（な、）

と云う声だ！ 私は氷を浴びたように悚然ぞっとした。

（しめ 閉しめい言つて、云わしやれても、な、埒明うちあかん。閉めれば、その

跡から開けるで、やいの。()

聞くと、筋も身を引釣ひつつった、私は。日暮に谷中の坂で聞いた、と同じじゃないか。もつとも、年寄りだれそれは誰某と人を極きめないと、どの声も似てはいるが。

それに、言い方が、いかにも邪慳じゃけんに、意地悪く聞えたせいか、幹事が、対あいて手は知らず、ちよつと詰なるように、

(誰が明けます。)

(誰や知らん。)

(はあ、閉める障子を明ける人がありますか。)

(棺ふたの蓋は一度じゃが、な、障子は幾いくたび度でも開けられる、閉たてられるがいの。)

(可いから、閉めて下さい、夜が更けて冷えるんですから、)と
 幹事も不機嫌な調子で言う。

(惜おきましょ。透通いて見えん事は無けれどもよ……障子越は目に雲霧じゃ、覗のぞくにはつきりとよう見えんがいの。)

(誰か、物干から覗くんですかね。)

(彼かれにも誰たれにも、大勢、な、)

(大勢、……誰です、誰です。)

と、幹事もはじめて、こう逆に捻ねじむ向うしろいて背後を見た。

(誰や言うてもな、殿、殿たちには分らぬ、やいの、形も影も、
 暗い、暗い、暗い、見えぬぞ、殿。)

(明るくしよう、)

と幹事も何か急込んで、

(三輪ちゃん、電燈を、電燈を、)

と云つたが、どうして、あの娘が動き得ますか。私の膝に、可哀相に、襟を冷たくして突臥したツきり。

「措きませ、措きませい。無駄な事よ、殿、地獄の火でも呼ばぬ事には、明るくしてかて、殿たちの目に、何が見えよう。……見えたら異事じゃぞよ、異事じゃぞよ、の。見えぬで僥倖いの、……一目見たら、やあ、殿、殿たちどうなろうと思わさる。やあ、)

と口を、ふわふわと開けるかして、声が茫とする。」

「幹事が屹きつとして、

（誰です、お前さんは、）

と聞いた。この時、睡ねむっていない人が一人でもあるとすれば、

これは、私はじめ待構えた問とだいった。

（私わしか、私か、……殿、）

と聞返して、

（同じ仲間のものじゃが、やいの。）

（夥なかま間？ 私たちの？）

（誰がや、……誰がや、）

と嘲るあざけるように二度言つて、

(殿たちの。私が言うは近間に居る、大勢の、の、その夥間じや、
という事いの。)

(何かね、廓くるわの人かね。)

(されば、松の森、杉の林、山やまふところ懐の廓のものじや。)

(どこから来ました。)

(今日は谷中の下したやみ闇から、)

(佐川さん、)

と少し声高に、幹事が私を呼ぶじやないか。

私は黙っていたんだ。

しばらくして、

(何をしに……)

(「とりあげ」をしようために、な、殿、「とりあげ」に來たぞ、やいの。)

(あかんぼ 嬰兒を産ませるのか。)

(今、無い、ちようど間に合うて「とりあげ」る小兒こどもは無い。)

(そんな、あつち 逃えたようなお産があるものか、お前さん、頼まれて來たんじや無いのかね。)

(さればのう、頼まれても來たれど、な、催促にももう來たがいの。來たれども、仔細しさいあつてまだ「とりあげ」られぬ。)

(むむ、まだ産れないのか。)

(何がいの、まだ、死にさらさぬ。)

(死……死なぬとは?)

(京への、京へ、遠くへ行っている、弟和郎に、一目未練が残るげな。)

幹事はハタと口をつぐんだ。

(そこでじやがや、姉めが乳の下の鳩落な、蝮指の蒼い爪で、ぎりぎりきりと錐きりを揉もんで、白い手足をもがもがと、黒髪を煽あおつて悶もだえるのを見て、鳥ならば活いきながら、羽毛けばを撈むしつた処よの。さて、それだけで帰りがけじやい、の、殿、その帰るさに、これへ寄つた。)

(そこに居るのは誰だ。)

と向うの縁側の処から、子爵が声を懸けた。……私たちは、フ

ト千騎の味方を得たように思う。

ト此方こなたで澄まして、

(誰でも無いがの。)

(いや、誰でも構わん。が、洒落しやれも串じようだん戯いも可い加減かげんにした方が可いと思う。こう言うと大人気ないが、婦人も居てだ。土地こつ児この娘も聞きいてる……一座をすれば我々の連中だ。悪いたずら戯いも可いが、余り言う事が残酷過ぎる。……外の事じゃない。

弟を愛して、——それが出来得る事でも出来ない事でも、その身代りに死ぬと云って覚悟をしている大病人。現に、夜伽よとぎをして、あの通り、灯あかりがそこに見えるじゃないか。

それこそ、何にも知らぬ事だ。ちつとも差支えは無いようなも

の、あわれなその婦を、直ぐ向うに苦しませておいて、呑氣そのに、夜通しのこの会さえ、何だか心ないような気がして、私なんぞは鬱いでいるんだ。

仕様もあるうのに、その病人を材料にして、約束の生命を「とりあげ」に来たが、一目弟を見たがるから猶予をした、胸に爪を立てて苦しませたとはどうだ。

聞いちやおられん、余り残酷で。可加減にしておきなさい。

誰だか。

と凜々と云う。

聞きも果てずに、

(酷いとは、酷いとは何じゃ、の、何がや、向うの縁側のその殿、

酷いとはいの、やいの、酷いとはいの。）

と畳掛けるように、しかも平気な様子。——向うの縁側のその

殿——とは言種いいぐさがどうだい。」

二十四

「子爵が屹きつとなつて、坐り直つた様ようだつけ。

（知らんか、残酷という事を、知らなけりや聞かせようじやないか、前へ出ないか、おい、こつちへ入らんか。）

（行ゆこうのう、殿、その傍そばへ参ろうじやがの、そこに汚穢むさいものがあるがや。早やそれが、汚穢むさうて汚穢むさうてならぬ。……退のけ

てくされませ、殿、）と言うんだ。

(汚むきいもの、何がある。)

(小井に入れた、青梅の紫蘇しそまき巻じや。や、香もならぬ、ふつつ。
ええ、胸悪やの、先刻さつきにから。……早く退どけしやらぬと、私わしも嘔も
吐どそう、嘔吐どそう、殿。)

茶うけに出ていた甘露梅の事だ。何か、女おんなご児も十二三でな
れば手に掛けないという、その清しやうじやう浄な梅漬を、汚穢けくてなら
ぬ、嘔吐すと云う。

(吐きたければ吐け、何だ。)

(二寸の蚯蚓みみず、三寸の蛇、そろそろと嘔吐すが怪けしゆうないか。
余り言い種くさが自棄やけだから、

(蛇や蚯蚓は構わんが、そこらで食つて来た饅飴うどんなんか吐かれては恐縮だ。悪い酒を呷あおつたろう。佐川さん、そこらにあつたら片付けておやんなさい。)

私は密そつと押遣おしやつて、お三輪と一所に婦人だちを背後うしろへ庇かばつて、座を開く、と幹事も退のいて、私に並んで楯たてになる。

次の間かけて、敷居の片隅、大きな畳の穴が開いた。そこを：
 …もくもく、鼠に茶色がかつた朦朧もうろうとした形が、フツ、と出て、浮いて、通つた。――

どうやら、臀しりから前さきへ、背後うしろ向きに入るらしい。

ト前へ被かぶさつた筈はずだけでも、琴の師匠の裸の腹はやっぱり見えた。縁側の柱の元へ、音もなく、子爵に並んだ、と見ると、：

：気のせいだろう、物干の窓は、ワヤワヤと氣勢けはい立って、奴やつが今居るあたりまで、ものの推おしこ込んだ様子がある。なぜか、向うの、その三階の蚊帳が、空へずツと高くなつたように思う。

ちようど、子爵とその婆ばばあとの間に挟まる、柱もたに凭もたれた横顔が婦人んなに見える西洋画家は、フイと立って、真ま暗くらな座敷の隅へ姿を消した。真個しんに寐入しっていたのでは無かつたらしい。

（残酷というのはね、仮にもしろ、そんな、優しい、可憐いじらしい、――弟のために身代りになるというような、若い人の生命いのちを「とりあげ」に来たなどという事なんだ。世の中には、随分、娑婆しゃばふさ塞さいげな、死しにぞこ損こないな、）

と子爵も間近に、よくその婆ばばあ々を認めたらう、……当てるよう

に、そう言つて、

（邪魔な生命いのちもあるもんだ。そんな奴やつの胸に爪を立てる方がまだしもだな。）

（その様な生命いのちはの、殿、殿たちの方で言うげな、……病やみほうけた牛、瘦やせさらぼえた馬で、私等わしらがにも役にも立たぬ。……あわれな、というはの、膏あぶらの乗つた肉じや、いとしいというはの、薰かおりの良いい血じやぞや。な、殿。——此方衆こなたしゆ、鳥を殺さしやるに、親子の恩愛を思わつしやるか。獸を殺しますに、兄弟の、身代りの見境みさかいがあるかいの。魚うおも虫おなじも同様での。親があるやら、一粒種やら、可愛いの、いとしいの、分隔てをめされますかの。

弱いものいうたら、しみしんしゃくもさしやらず……毛むしを、る、

腹を抜く、背を刮く……串刺じや、ししびしおじや。油で煮る、
 火炎で焼く、活きながら鱸にも刻むげなの、やあ、殿。……餓じ
 くばまだしもよ、榮耀ぐいの味醂蒸じや。

馴れば、ものよ、何がそれを、酷いとも、いとしいとも、不
 便なども思わず。——一ツでも繋げる生命を、二羽も三頭も、飽
 くまでめさる。また食おうとさしやる。

誰もそれを咎めはせまい。咎めたとて聞えまい、私も言わぬ、
 私もそれを酷いと言わぬぞ。知らぬからじや、不便もいとしいも
 知らねばこそいの。——何と、殿、酷い事を知らぬものは、何と
 殿、殿たちにも結構に、重宝にあらうが、やいの、のう、殿。)
 (何とでも言え、対手にもならん。それでも何か、そういうもの

は人間か。)

と吐出すように子爵が言った。」

二十五

「ト其奴が薄笑いをしたようで、

(何じゃ、や、人間らしく無いと言うか。誰が人間になろうと云うた。殿たち、人間がさほど豪いか、へ、へ、へ、へ、)

とさげすんで、

(この世のなかはこの、人間ばかりのもので無い。私等が国はの、

——殿、殿たちが、目の及ばぬ処、耳に聞えぬ処、心の通わぬ処、

——広大な国じやぞの。

殿たちの空を飛ぶ鳥は、私等わしらが足の下を這廻はいまわる、水底みなそこの魚うおが天翔あまかける。……烏帽子えぼしを被かぶつた鼠ねずみ、素袍すおうを着た猿、帳面ちやうめんつける狐も居る、竈かまどを炊く犬も居る、鼬いたちが米舂こめつく、蚯蚓みみずが歌う、蛇が踊る、……や、面白い世界じやというて、殿たちがものとは較べられぬ。

何——不自由とは思わねども、ただのう、殿たち、人間が無いに因つて、時々来ては攫さらえて行く……老若男女ろうにやくなんによの区別は無い。釣針つりばねにかかった勝負じや、緑の髪も、白髪しらがも、顔はいろいろの木で偶くの坊。孫等まごどもに人形の土産じやがの、や、殿。殿たち人間の形は、私等が国の玩弄物おもちゃじやがの。

身代りになる美しい婦などは、白衣を着せて雛にしよう。芋

殻の柱で突立たせて、やの、数珠の玉を胸に掛けさせ、

いや、もう聞くに堪えん。

(まあ、面を取れ、真面目に話す。)と子爵が憤ったように言う。

(面、)

(面だ。)

面だ、面だ、と囁く声が、そこここに、ひそひそ聞えた。眠ら

ずにいた連中には、残らず面に見えたらしい。

成程、そう言えば、端近へ出てから、例の灯の映る、その扁

平い、むくんだ、が瓜核といった顔は、蒼黄色に、すべす

べと、皺が無く、艶があつて、皮一重曇つた硝子のように透通

つて、目が穴に、窪んで、掘つて、眉が無い。そして、唇の色が黒い。気が着くと、ものを云う時も、奴やつ、薄うすわらい笑わらをする時も、さながら彫刻ほりつけたもののように静じつとしたツきり、口も頬もビクとも動かぬ。眉……眉はぬつペリとして跡も無い、そして、手拭てぬぐいを畳んだらしいものを、額下りに、べたん、と頭へ載せているんだ。

(いや、いや、)

と目鼻の動かぬ首を振つて、

(除とるまい、除らぬは慈悲じゃ。この中には、な、画えを描かき彫ほり刻もをする人もある、その美しいものは、私等わしらが国から、遠く指ゆびさす花はな盛はなざかりじゃ、散らすは惜しいに因つて、わざと除らぬぞ……)

…何が、気の弱い此方たちが、こうして人間の面を被つておればこそ、の、私が顔を暴露いたら、さて、一堪りものう、髯が生えた玩弄物に化ろうが。）

（あかりつ）

（灯を点けよう、何しろ。）

と、幹事が今は蹠跟けながら手探りで立とうとする。子爵が留めて、

（お待ちなさい。串戯も嵩じると、拔差しが出来なくなる。誰か知らんが、悪戯がちと過ぎます。面は内証で取るが可い、今の内ならちつとも分らん、電燈を点けてからは消え憎くなるだろ。）

子爵はどこまでも茶番だ、と信ずるらしい。

……後で聞くと、中には、あいてこしら 对方を拵えて、うけこたえ 応答をする、子爵その人が、悪戯をしているんだ、と思つたのもあつたんだ。

(明るさ、暗さの差別は無いが、の、の、殿、私わしがしよう事、それをせねば、日が出ましても消えはせぬが。)

(可よし、何をしに来たんだ、ここへ。……まあ、仮にそつちが言う通りのものだとすると。)

(されば、さればの、殿。……)

とまた落着いたように、ぐたりと胸を折つた、うづくま 蹲つた形が、ひしや 挫げ
て見えて、

(身代りが、——その儀ことで、やいの、の、殿、まだ「とりあげ」
が出来ぬに因つて、一つな、このあたりで、間に合わせに、と奪ろ

う！……さて、どれにしようぞ、と申うて見入つて、なが視め廻まわいて

いたがやいの、のう、殿。）

みんな皆、——黙つた。

（殿、ふときまぐ氣紛れて出て、思おもい懸がけのうねんごろ懇申したしるし験じや、の、殿、

望ましいは婦人おんなどもじや、何と上じょうろ臈ろうを奪うばろうかの。）

婦人おんなたちのその時の様子は、察さつして可よかろう。」

二十六

「奴やつは勝ほこつた体ていで、毛筋も動かぬその硝子面ピイドロめんを、穴蔵の底
に光る朽木のように、仇あだつや艶えんを放はなつてみまわしながら、

(な、けれども、殿、殿たちは上臈じょうろうを庇かばわしやろうで、懇申ねんごころした効かいに、たつてとはよう言わぬ。選えらまつしやれ、選えらんで指さつしやれ、それを奪とろう。……奪とろう。……それを奪とろう！ やいの、殿。)

と捲まくし掛けて、

(ここには見えぬ、なれども、殿たちの妻、子、親、縁者しもべ、奴はした婢はした、指さつしやれば、たちどころに奪とつて見しよう。)

と言語道断な事を。

とはたはたと廂ひさしの幕が揺動ゆどういて、そのなぐれが、向う三階の蚊か帳やを煽あおつた、その時、雨を持った風が颯さつと吹いた。

(また……我を、と名告なのらつしやれ……殿、殿ならば殿を奪とろう

。

(勝手にしろ、馬鹿な。)

と唾吐くように、忌々しそうに打棄つて、子爵は、くるりと戸外を向いた。

(随意にしようでは氣迷うぞいの、はて?……)

とその面はついたりで、畳込んだ腹の底で声が出る。

(さて……どれもこれも好ましい。やあ、天井、屋の棟にのさばる和郎等! どれが望みじや。やいの、)

と心持仰向くと、不意に何と……がらがら、どど、ガツと鼠か鼯だろう、蛇も交るか、凄じく次の室を駆けて荒廻ると、ばらばらばらと合せ目を透いて埃が落ちる。

(うむ、や、和郎等。埃を浴びせた、その埃のかかったものが欲しいと言うかの——望みかいの。)

ばたばた、はらはらと、さあ、情ない、口惜いが、袖や袂を払いた音。

(やれ羽打つ、へへへ、小鳥のように羽搔を煽つ、雑魚のように勿ねる、へへ。……さて、騒ぐまい、今がはそで無い。そうでは無いげじや。どの玩弄物欲しい、と私が問うたでの、前へ悦喜の雀躍じや、……這奴等、騒ぐまい、まだ早い。殿たち名告らずば、やがて、選ろう、選取りに私が選つて奪ろう！)

(勝手にして、早く退座をなさい、余りといえは怪しからん。無礼だ、引取れ。)

と子爵が喝した、叱ったんだ。

(催促をせずと可うござる。)

と澄まし返つて、いかにも年寄くさく口の裡うちで言つた、と思つと、

(やあ、)

と不意に調子を上げた。ものを呼びつけたようだつて。幽かすかに一
つ、カアと聞えて、またたく間に、水道尻から三ツのその灯あかりの上
へかけて、棟近い処で、二三羽、四五羽、鳥が啼ないた、可厭いやな声
だ。

(カアカアカア——)

と婆ばばあ々が遣やつたが、嘴くちばしも尖とがつたか、と思つ、その黒い唇から、

正しょうじん 真まの鳥の声を出して、

(カアカア来しやれえ！ 火の車で。)

と喚わめく、トタンに、吉原八町、寂しんとして、廓くるわの、地じの、真まんなか中

の底から、ただ一ツ、カラカラと湧わきあが上あつたような車の音。陰々

と響ひびいて、——あけ方早歸りの客かも知れぬ——空へ舞上つたよ

うに思うと、凄すげい音がして、ばツさりと何か物干の上へ落ちた。

(何だ！)

と言うと、猛然として、ずんと立って、堪たえられぬ……で、地じ

響ひびで、琴の師匠がずかずかと行って、物干のぞを覗のぞいたつけ。

裸はだぬ脱だぎの背に汗を垂たらたら々と流したのが、灯ともで幽かすかに、首やみを暗夜へ

突つ込こむようにして、

（おお、稲妻が天王寺の森を走る、……何じや、これは、鳥の死骸をどうするんじやい。）と引^ひ搦^つか^かんで来て、しかも癩^{しやく}に障^さつた様子で、婆^ば々^ばの前^{まへ}へ敲^{たた}きつけた。

あ、弱^よつた。……

その臭^く気^きといつたらない。

皆^{みんな}、ただ呼^い吸^きを詰^じめた。

婆^ば々^ばが、ず^ずら^ずらと^とその蛆^{うじ}の出^でそ^そう^うな^な鳥^{とり}の死^し骸^{がい}を、膝^{ひざ}の前^{まへ}へ、蒼^{あお}い^{いと}頤^がの下^{した}へ引^ひ附^つけた。」

「で、頭ずを下げて、熟じつと見ながら、

(蠅はえよ、蠅はえよ、蒼蠅あおばえよ。一つ腸はらわたの中を出でされ、ボーンと。――

やあ、殿、上じょうろう 藤とうたち、私わしがの、今ここを引取るついでに、蒼

蠅を一ツ申そう。ボーンと飛んで、額、頸えりくび首せなか、背、手足、殿た

ちの身体からだにボーンと留まる、それを所望じゃ。物干へ抜いて、大

空へ奪とつて帰ろう。名告なのらしやれ。蠅がたからば名告らしやれ。

名告らぬと卑怯ひきようなぞ。人間は卑怯なものと思うぞよ。笑うぞよ

……可よいか、蒼蠅を忘れまい。

蠅よ、蠅よ、蒼蠅よ、ボーンと出され、おじやった！ おお！

一座残らず、残念ながら動揺どよめいた。

トふわりと起たつたが、その鳥の死骸をぶら下げ、言おうようの

無い悪臭を放つて、一寸、二寸、一尺ずつ、ずるずると引いた裾すそが、長く畳を摺すつたと思うと、はらりと触つたかして、燭しよく台だいが、ぼったり倒れた。

その時、捻ねじむ向いて、くなくなと首を垂れると、摺すつた後うしろ 棲づまを、あの真まつくろくちばし黒な嘴くちばしで、ぐい、と啣くわえて上げた、と思え。……鳥のような、獣のような異いてい体な黄色い脚を、ぬい、と端折はしよつた、傍若無人で。

(ボーン、ボーン、ボーン、)と云うのが、ねばねばと、重つくるしく、納豆の糸を引くように、そして、点ほちほち々と切れて、蒼蠅の羽音やら、奴やつの声やら分らぬ。

そのまま、ふわりとして、翻ひらり然あがと上つた。物干の暗黒やみへ影も隠

れる。

(あれ。)

と真まっさき前に言つたはお三輪で。

(わ、)とまた言つた人がある。

さあ、膝で摺ずる、足で退のく、ばたばたと二階の口まで駆出した

が、

(ええ)と引返ひっかえしたのは誰だっけ。……蠅うしろが背後から縫すがつたらし

い。

物干から、

(やあ、小鳥のように羽打つ、雑魚ざこのように匆はねる。はて、笑止じやの。名告なのれ、名告らぬか、さても卑怯な。やいの、殿たち。

上臈たち。へへへ、人間ども。ボーン、ボーン、ボーン、あれ、それそれ転ぶわ、^のめるわ、^は這うわ。とまったか、たかったか。

誰じゃ、名告れ、名告らぬか、名告れ。……ボーン、)

と云う時、稲妻が閃^{ひら}めいて、遠い山を見るように天王寺の森が映った。

皆ただ、蠅の音がただ、^{はた}雷^{たがみ}のように人々の耳に響いた。

ただ一縮みになった時、

(ほう、)

と心着いたように、物干のその声が、

(京から人が帰ったような。早や夜もしらむ。さらば、身代りの^{おんな}婦を奪ろう!……も一つ他^{ほか}にもある。両^{たもと}の袂^{もち}で持^{もち}重^{おも}ろう。あと

は背負うても、抱いても荷じや。やあ、殿、上臈たち、此方衆こなたしゆにはただ遊うだじやいの。道すがら懇申ねんごろした戯たわむれじや。安堵あんどさつしやれ、蠅たなそこは掌へ、ハタと掴つかんだ。

さるにても卑怯ひせつなの、は、は、は、梅干で朝の茶まいれ、さらばじや。)

ばつと屋上やのうえを飛ぶ音がした。

フツと見ると、夜が白しらんで、浅葱あさぎになつた向うの蚊帳かやへ、大きな影がさしたつけ。けたたましい悲鳴が聞えて、白地の浴衣を、扱帯しごきも蹴出けだしも、だらだらと血だらけの婦おんなの姿が、蚊帳の目が裂けて出る、と行燈あんどうが真赤まっかになつて、蒼い細い顔が、黒髪かみを被かぶりながら黒雲の中へ、ばつたり倒れた。

ト車軸を流す雨になる。

電燈が点いたが、もうその色は白かった。

婆々の言つた、両の袂の一つであろう、無理心中で女郎が一人。

戸を開ける音、閉める音。人影が燈籠のように、三階で立騒いだ。

照吉は……」

と民弥は言つて、愁然しゅうぜんとすると、梅次も察して、ほろりと泣く。

「ああ、その弟ばかりじゃない、皆みんなの身代りになつてくれたように思う。」

明治四十四（一九一）年三月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成⁴」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年10月24日第1刷発行

2004（平成16）年3月20日第2刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十三巻」岩波書店

1941（昭和16）年6月30日発行

※誤植の確認には底本の親本を参照しました。

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2006年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

吉原新話

泉鏡花

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>